
真・恋姫†無双～大陸に降り立つ者～

ウッキー君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜大陸に降り立つ者〜

【Nコード】

N6338Z

【作者名】

ウツキー君

【あらすじ】

これは《TINAMI》にも掲載しています。

登場人物紹介

オリジナルキャラクター

姓：孫そん

姓：孫りょう

名：？（雨＋□□□＋龍）

字：仲然ちゅうぜん

真名：龍蓮りゅうれん

親：孫堅（母）

実姉：孫策（姉）

実妹：孫權（双子妹） 孫尚香（末妹）

義弟：鳳凰

義妹：袁術

所属：孫？軍

身長：176cm

体重：70kg

服装：和服（NARUTO - 疾風伝 - うちはサスケ - 黒ver.）

武器：（背） 大太刀・贄殿遮那 袁術軍非公式大將軍容認斬鉄剣

（右腰） 妖日本刀・初代鬼徹 妖日本刀・二代鬼徹 妖日

本刀・三代鬼徹

（左腰） 日本神刀・草薙剣 日本神刀・？霊剣 日本神刀・

神度剣

能力：知 / 105 武 / 105 魅 / 105 政 / 105 統 / 1

05 総 / 525

紹介：裏設定としては上級の神様。「詳しくは”にじファン”ウツ

キー君『人間の神』へ」

という訳で、天の知識などを巧みに駆使し《上手く描ける
かは微妙です》

後に建国する孫蜀と孫呉の二頭天下を目指す。その為に自国の発展のみならず、他の諸侯に良い人材が行かぬように

妨害工作や他陣営に入る前に引き込むなど、群雄割拠の世になる前から動き出し陣営の強化を図ってきた。

その中でも特に頭脳面の強化を図り、他軍の筆頭軍師が居なくなったり、質が下がったりするほど。

それは、『軍師萌え』疑惑が出るほどの人材コレクターとまで云われるほどだとか・・・

種馬2号にはならない予定だが、一夫一妻にはならない予感
つていうか予定運命。↑by 雪蓮

内政と軍事の両方でチート知識を使うので孫蜀兵最強！！に
しかない超危険人物。

自身の使う武器はネタになる可能性が絶大。次は一牙六爪流
と・・・武器は何が出るかな・・・??（ネタバレ！）

あ、彼は『イケてるメンズ』略して『イケメン』です。

姓：呂りゅう

名：霸は

字：奉勝ほうしょう

真名：嵐らん

兄妹：呂布（妹）

所属：孫？軍

身長：185cm

体重：80kg

服装：和服（BLEACH 黒崎一護・卍解ver.）

武器：煌黒堅鎚・亜流雌蛇（モンスターハンター 煌黒堅鎚アルメ
タ）

能力：知／55 武／105 魅／72 政／32 統／91 総

/ 3 5 5

紹介：恋の兄であるが故の礼儀正しさと親しみやすさを持ち合わせている人物。

その為、初対面の人と話すときは自然と堅苦しくなる。が、隣に親しい者がいる場合は、

それも多少ながら薄まる。それと恋同様、動物に懐かれやすく、明命に羨ましがられる。

大陸でも一番を争うくらい武に長けているため、自分と同等の力がある人物と出会うと、

嬉しいらしく、後先を全く考えずに全力で何刻でも何合でも打ち合う。人はそれを暴走という。

姓：鳳ほう

名：鳳おう

字：朱雀すざく

真名：紅龍こうりゅう

所属：孫？軍

兄妹：鳳統（妹）

義兄：孫？

身長：140cm

体重：30kg

服装：修行服（DRAGONBALL 孫悟飯（少年期））

武器：緋龍偃月刀

能力：知 / 76 武 / 75 魅 / 59 政 / 89 統 / 81 総 / 380

紹介：ナイス男の娘。それ以上でも以下でもない。外見は雛里に瓜二つで、違いは髪型が

雛里の長い部分を切っただけという感じである。劉備と公孫

賛と一緒に私塾で学んだ過去がある。

軍師の真似事も出来るが、残念ながら双子の妹である雛里には遠く及ばない。

照れ屋ではあるが、恥ずかしがり屋や人見知りではない。寧ろ人懐っこい性格。

過去に某巨乳さんに窒息死させられそうになった過去を持っているため、巨乳の人に苦手意識を持っている。

姓：大友
おおとも

名：隆
りゅう

年齢：20歳（某有名大学法学部2年生）

親：大友曹臨 大友亜希子（旧名：立花亜希子）

兄弟：古手洸太（↑18歳にして婿入り 相手は16歳）〔基本的
に物語に關係ない設定〕

身長：176cm

体重：66kg

所属：曹操軍

武器：雷切 圧切

服装：上がパーカー 下がジーンズ

剣術：立花流 - 大友式 - 刀剣法 - 二之術

能力：知 / 93 武 / 57 魅 / 92 政 / 94 統 / 91 総 /
427

紹介：父が大友宗家の末裔。母が立花宗家の末裔。しかも父方の祖母は島津分家の末裔で母方の祖母は黒田宗家の末裔。

つまり戦国の九州地方を代表する豪傑のミックス。そして、その血が大いに戦場で役に立つことになる。

島津の分家の血も混ざってはいるが、別段北郷一刀と知り合
いな訳ではない。

昔ながらの名家の生まれからか、少々古風な考えを持っていたりもする。

だから、魏の種馬などとは全くの無縁になるだろうと、物語が始まる前から断言しておく。

それに現代では、某国立大学の法学部という高学歴の持ち主でもあるため将としても為政者としてもかなり有能。

特に現代では、刑法や犯罪学などに精通していたので、その方面でも活躍の場面があるかも。

武将としての実力は沙和や真桜レベルだが、将としては華琳と比べても見劣りしないレベルである。

又、軍師としても優秀でこの世界では曹操軍には桂花と風と稟がないため、筆頭軍師を任されている程。

龍蓮の異世界同位体であるため、顔や背格好が全く同じ。違うのは体重だけ、あと環境的に多少隆の方が肌色が薄い。

姓：徐じょ

名：晃こう

字：公明こうめい

真名：蘭花らんぷあ

所属：曹操軍

身長：155cm

体重：48kg

能力：知 / 32 武 / 71 魅 / 67 政 / 21 統 / 59 総 / 250

紹介：大友隆の記念すべき部下第1号。ちょっぴりお茶目でお馬鹿で乙女チックなところも多少ある娘。

性格としては明るく元気で早とちりというか、まあ文醜みたいな突撃属性持ち。

今後は、天の御使い・大友隆の武の右腕として活躍をする予定である。

姓：満まん

名：寵ちよう

字：伯寧はくねい

真名：奏歌そうか

所属：曹操軍

身長：172cm

体重：52kg

能力：知 / 71 武 / 46 魅 / 36 政 / 71 統 / 26 総 /

250

紹介：大友隆の第2号。武に関しては、于禁と同じく特記する事柄はないが、知に関しては

軍師でもある大友隆の手伝い軽い助言程度ならできる。背が高くスレンダーな事を気にしている。

今後は、天の御使い・大友隆の知の右腕として活躍をする予定である。

姓：紀き

名：霊れい

真名：未那みな

所属：袁術軍

能力：知 / 36 武 / 87 魅 / 52 政 / 33 統 / 67 総 /

275

紹介：張勳（七乃）の性質？性癖？をもってして、しかしそれを龍

蓮に向ける意味不明な人。

もちろん、袁術（美羽）のことも敬愛している。それよりも謎なのが、稀になのだが、

この世界にはないネタを取り入れるということだ。あと、張勳（七乃）と対比するので

あるならば、武はこっちに利があり、知《主に悪知恵》は向こうに利がある。

ポジシヨン的には、奇妙なお姉さんのな立ち位置を目標にしているが、無理だろう。

姓：諸葛^{しよかつ}

名：瑾^{きん}

字：子瑜^{しゆ}

真名：朱衣^{しゆい}

親：諸葛珪

姉妹：諸葛亮 諸葛均

所属：袁術軍 - 客将 - 孫呉軍

能力：知 / 78 武 / 23 魅 / 55 政 / 80 統 / 64 総 / 300

紹介：武官ではなく軍師兼文官をやっているが、今は龍蓮の付き人をやっている。

龍蓮の2つくらい年上。そんな彼女は、龍蓮に心を揺さぶられていたりいなかったり・・・

通称・たわわ軍師。心の声でも囁んでしまうこともしばしばあったりする。

妹の諸葛亮（朱里）に、残念ながら勝るものは何もないと思っているが、胸は勝っている。

とは言っても、特別大きいわけでもないのだが、しかしこの幼児体型にしては大きい方。

実は、メインヒロインにしようか迷っている人物でもあったりする。

姓：諸葛

名：均

字：子魚

真名：朱那

所属：袁術軍 - 客将 - 孫呉軍

親：諸葛珪

姉妹：諸葛瑾 諸葛亮

身長：115cm

体重：20kg

服装：諸葛孔明とお揃いのアレ

能力：知 / 77 武 / 10 魅 / 36 政 / 78 統 / 59 総 /

250

紹介：朱衣と朱里の妹。 諸葛姉妹の末妹。 頭は良いのだが、文字変換すると全てが平仮名になるという

謎な性質を持つ女の子。 多分、璃々の次に小さいキャラかと思われる。

姉達とはとても仲が良く、特に朱衣とは手紙（でいいのかな？）のやりとりをしょっちゅうやるど。

恥ずかしがり屋、照れ屋などで「たわわ」「はわわ」などする姉達に比べて、割と・・・いや随分

ず・い・ぶ・ん！！堂々としている。・・・が、まださほど羞恥心がないのではなからうか。

否、純粹無垢なだけなんだ。だって姉達は・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・あれだろ？

± 神世界しんせいかいの住人±

大神様おおがみさま - 全神ぜんしんの長なが（原始神げんしん）

全ての始まりを創った神。 150億歳で正室に1人、側室に数兆人がいるとされている。

身長は3m50?である。妻の名は須臾で子供は1人いるその子供こそが刹那である。

?? - 創造そぞうの神のかみ（第1貴子）

原始神に代わって世界の創造を行っている。

?? - 破壊はかいの神のかみ（第2貴子）

原始神に代わって世界の消去を行っている。

?? - 思想しそうの女神のめがみ（第9貴子）

謎の多い女神。女神のなかでは最高位である。

刹那 - 転生の女神（第13貴子）

大神様唯一の実子であり愛娘。その分、結構我侘な所がある。しかし裏腹に

他人思いな点もある。大友隆を異世界に放り込んだ張本人であり、大友隆に一目惚れした

恋する乙女でもある。故に人世界に隆を追いかけてくることもある。

見た目は人間で言う7、8歳なのだが、5000年以上生きている。

- 龍

刹那のお世話係を担当している人。容姿はお爺様。

- 古手羽入《ハイ||リユーン・イエアソムール・ジエダ》
義理の妹であり、転生術の知識を少しだけ受け継いでいる。

しかし、羽入には

神世界の住人であった記憶は無くなってしまっている。

無双 - 武術の神（第26貴子）

刹那の幼馴染で武術（剣術や体術など）に優れている。

心覚 - 記憶の女神（第39貴子）

刹那の幼馴染で親友。魂のみとなった死者の記憶を覗いたり消したりできる。

?? - 術使の神（第40貴子）

基本的なものを含め広く多くの神術を使う。

?? - 火帝の神（第44貴子）

神術の‘火ノ書’を得意とする。

?? - 水帝の神すいていのかみ（第45貴子）

神術の‘水ノ書’を得意とする。

?? - 風帝の神ふうていのかみ（第46貴子）

神術の‘風ノ書’を得意とする。

?? - 土帝の神どていのかみ（第47貴子）

神術の‘土ノ書’を得意とする。

?? - 雷帝の神らいていのかみ（第48貴子）

神術の‘雷ノ書’を得意とする。

第一章 第一話

プロローグ―孫呉に降り立つ者―

時は現代西暦20XX年から約1800年前も過去の話。しかし、世界の異なる過去の話だが……。そんな場所に飛ばされている1人の少年。いや、飛ばされているというよりは派遣というべきか？それが彼の仕事なのだから。

彼の名は、姓は孫そん。名は？りょう。字が仲然で、真名が龍蓮りゅうれん。

この名を持つ歴史上の人物などは存在しない。しかし、彼は歴とした江東の虎・孫文台の息子なのである。そして姉には江東の小霸王・孫伯符が、双子の妹には孫仲謀が、そして年の離れた妹には孫尚香がいる。

そして、これはそんな孫仲然が亡き孫文台の望みを叶えるために姉妹と仲間達と天下平定を成す軌跡を描いた物語……

―孫呉に降り立つ者―孫策& a m p・周瑜& a m p・諸葛瑾√

冥琳

「それでは申し訳ないが、よろしく頼む。」

と、孫呉に仕える筆頭軍師・周瑜こと冥琳に頭を下げられる。

雪蓮

「心配ないわよ、冥琳。いいリュウ？袁術が隙を見せたらスグ！いい！？スグよ！？スグに頸を叩き切ってしまいなさい。」

龍蓮

「そんなこと言われても、オレは自分の得物の1つも持っていけない所詮、人質みたいな・・・いや人質なんだけど・・・」

今のオレの状況を説明すると、袁術の客将になった孫呉が万が一でも裏切らないための保険つまりは人質なのである。そんな真似が出来る自由を与えられる訳がない。

朱衣

「そ、そんな危険なことさせましえん！！・・・た、たわわ、噛んじゃった。」

雪蓮

「冗談よ。冗談。そんなに焦らなくても良いわ、朱衣。」

と言う姉貴に

龍蓮

「姉貴ならやりかねない。」

冥琳

「今だけは雪蓮が孫家の長子で良かったとしみじみ思う。」

朱衣

「・・・ですね。」

3人からのゆっくり静かな、そして重い口撃のトリプルパンチを喰らう。

雪蓮

「うつ・・・皆のイケずう!!」

と言って城内へ去っていつてしまった。全く、暫くの別れだっていうのにギャグで終わらせる気か？

龍蓮

「何か締まらない気がするけど・・・冥琳、姉貴のお守り頼んだよ。」

朱衣

「行ってまいりましゅ!」

―孫呉に降り立つ者―諸葛瑾& a m p・袁術& a m p・張勲& a m p・紀靈✓

母・孫文台が劉表配下の黄祖との戦いで戦死した後、姉の孫策が引

継ぎ、袁術の客将となり勢力の安定を図った孫家は、勢力拡散のためにバラバラにされてしまった。そしてオレは、名目上は袁術の御世話係として、しかし実際には人質として今は袁術が治める城に着いていた。

張勳

「ようこそいらつしやいました。お嬢様の下で將軍職に付いています張勳と申します。」

龍蓮

「初お目見得に掛かります。孫策の弟、孫仲然です。この度は袁術様の御世話係として参りました。よろしくお願いします。」

朱衣

「たわわ・・・孫？様の付き人を命じられた諸葛子瑜でしゅ。お、お世話になりましたしゅ！・・・（また、噛んじやった）」

張勳

「クスツ・・・こちらこそ。・・・では、お嬢様の所へお連れしますので付いてきてください。」

龍蓮 & a m p ・朱衣

「「はい。」」

それから城内を軽く紹介されながら暫く道なりに行くと、随分と大きな広間に出た。するとそこにはチッコイ少女が1名、玉座の上でギヤアギヤア喚いていた。

袁術

「七乃く七乃く七乃はおらぬかく……蜂蜜水は何処じゃく……妾は、蜂蜜水が飲みたいのじゃく」

張勳

「はいはい！只今お持ちしますねく」

龍蓮

「……………（大丈夫か？コイツら）」

朱衣

「……………（た、確かにこれなら龍蓮様でしたら暗殺など容易そうでしゅね）」

そんなこんなで、それから袁術と言葉を交わすまでに30分位は待たされただろう。

袁術

「それで七乃？こやつは一体何者なのじゃ？」

張勳

「美羽様。この方達は客將の孫策さんの弟君とその付き人ですよ。今日の朝の内に伝えておいたじゃありませんかあ。」

袁術

「はて、そうじゃったかの？妾は七乃の話など一言も聞いてなかつ

たのじゃ〜」

張勳

「あはは・・・流石は美羽様ですね！本人を目の前にそこまでズケズケと仰られるなんて。このお調子者！大馬鹿者お！」

袁術

「そうじゃろ！そうじゃろ？七乃もつと褒めてたも〜」

龍蓮

「・・・・・・・・・・・・・・・・（なんなんだ？可哀想過ぎて逆に可愛く見える！？）」

朱衣

「・・・・・・・・・・・・・・・・（た、たわわ・・・前言撤回でしゅ。わ、私でも出来そうです）」

と、まあ。初お目見得の時は、こんな感じ。実際、彼女らの性格は自己中心的というか唯我独尊というか我田引水というか、そんな感じだが何故か憎めないような描写をされているせいか、オレは袁術の勢力を完全に崩壊させるために動くのではなく、今の状況を少しは改善をした上で、将来的に取り込めるような形で、距離を縮めようと思った。

初お目見得の時から2週間弱が過ぎたある日のこと。オレは、いつもと同じように袁術にお勉強を教えていた。しかし、いつもと違うのは張勳が書類仕事の為、隣に居ないことだ。ついでに言うとな衣は、個人的な勉強と称して図書室に籠っている。しかし・・・

袁術

「仲然く蜂蜜水はまだかのく七乃く七乃はおらぬかくもう妾は無理じゃく助けてたもく」

龍蓮

「えーつと順番に答えていくと、蜂蜜水は今日の分を飲みきつちやったから無理。張勳さんも珍しく仕事中だから無理。公路は偉いからまだ頑張れる。助けてくれそうなのは張勳さんだけど張勳さんはさつきも言ったように仕事中だしそれに手が空いていても『お勉強が嫌で涙目になっているお嬢様も可愛いですう』みたいになつてると思うから結局、全部無理。」

??

「くうくう！！ウチの可愛いお嬢様にもバツサリ一刀両断な？君。そこに痺れるう懂れるう！！」

龍蓮

「あ、あのく突然後ろから抱き着いてくるのやめてもらえませんか？紀霊さん」

そう、この人が紀霊さん。通称・そのベクトルを向ける人を間違えた張勳さん。いい人ではあるのだが、少々疲れる。

紀靈

「嫌ですねえ、？君。私のことはお姉ちゃんって呼んでくださいって言ったじゃないですかあ」

龍蓮

「……聞いた覚えはありません。」

紀靈

「では、私のことはどうぞ末那とお呼びください。」

内心、溜め息をついた。

龍蓮

「それ受け取っちゃうと、どこまでも付いてきてくれそうなのがするんですけど・・・」

紀靈

「もちろんですよ？君がいるのなら例え、火の中、水の中、草の中、森の中、土の中、雲の中、あのコのスカートの中までも付いていきますよ？」

暫しの沈黙。

龍蓮

「公路。」

袁術

「うー何じゃ？」

龍蓮

「ここに離反の疑いがある人が。」

そう言つて、まだ背中に張り付いている紀霊さんを指す。すると、グダグダとしていた公路の表情が急に暗くなり涙を滲ませた。

袁術

「未那あゝお主、妾のことが嫌いになつたのかえ？・・・うつうつ
」

あ、やりすぎた？

袁術

「仲然？お主は、妾のことが嫌いになつたりはせんじやろつのか？」

涙目に上目遣い。いくらアホの子だとはいえ、外見は幼いとはいえ
A A + だろつ。・・・普通に可愛い。ギューってしたいくらいには。

龍蓮

「そうだね．．．じゃあ、まず。民に好かれることをしているのか。」

その答えにポカンとしている公路。

龍蓮

「とりあえず、税の引き下げ。その次に国を挙げての田畑の開墾。それに伴う失業率の緩和。街の風紀を取り締まる警備隊の設立。あとは．．．明らかに酷すぎる賄賂をやる文官の解雇。さあさあこれくらいは、パパッとやっちゃって早く遊ば？」

袁術

「で、でも税を引き下げると蜂蜜水を飲めなくなるんじゃないのかえ？」

龍蓮

「大丈夫だよ。今は、5の民から10を取り上げているけど、良い政をしたら民が集まる。そうすると20の民から15をもらう。そして民の負担は減って公路は好かれる。そして公路の蜂蜜水は増える。良いことだらけじゃないかな？」

袁術

「???妾には、政はわからぬ。．．．じゃが良いことなのは分かった。仲然、好きにすると良い。」

紀霊

「お、お嬢様？流石にそれは．．．」

そりゃあそうだ。一体どこに人質に政を一任する奴がいる……。

袁術

「ん？どうかしたかえ？」

龍蓮

「オレは別に良いんだけど。袁家の家臣が黙ってないと思うよ？」

袁術

「何でじゃ？妾の言うことが聞けない奴しかおらんのかえ？」

龍蓮

「違うよ。公路とオレは家族でもなく、ましてや元々の配下でもなかったのに行き成り皆の上に立つたら怒られるだろ？」

それから暫く公路は『うゝうゝ』と唸っていたが、急に表情が明るくなったかと思えばトンデモ爆弾を投下した。

袁術

「そうじゃ！仲然と妾が家族になればいいのじゃ！」

何とも単純な頭に、どうしたものかとオレは頭を悩ませる。そして、背中にいる紀霊さん……紀霊も同じようだ。

紀霊

「お嬢様！ダメです！」

袁術

「へ？名案じゃと思うたのに。」

そうだ、理解をさせることはできなくとも納得させてやれ。

紀霊

「私がお嫁さんになるんですから！！！」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
もう知らない。

袁術

「だから、仲然が妾の兄となれば良からう？」

紀霊

「！？そうですね・・・それは気付きませんでした。流石、美羽様ですね。臣下である私の女としての幸せを第一と考え、ご自分が多大なる我慢をしそれでも尚、？君の隣を開けておいて下さるなんて・・・！！」

ツツコミを入れるのを戸惑うくらいの甚だし過ぎる勘違い。悪いけど、0秒間の脳内会議の結果、流すことに決まった。いや、既に確定事項であつた。

龍蓮

「分かった。今日からオレが公路の兄貴な？」

袁術

「妾の真名は、美羽じゃ。これからはそう呼ぶと良い。お義兄様。」

――孫呉に降り立つ者――諸葛瑾& a m p・張勲& a m p・紀靈✓

オレが袁術・・・いや、美羽と義兄妹の契りを交わして間もなく、どんなに甘く見てもコイツは駄目だろ。という文官を次々と全財産没収した後に排除、その代わりに新人の文官を登用した。もちろん、美羽名義で。そこからは、トントン拍子に進み御世話係兼人質という身分であるにも関わらず、内政の政策などの会議では口出しを認められるまでになっていた。そして、内政に深く関わるにつれてどんどんと美羽の太守としての真相が暴かれていくのであった。

龍蓮

「これは・・・酷いな。」

朱衣

「・・・あれは少々強引でしたが、今回ばかりはもう少し踏み切っても良かったかもしれないでしゅね。（たわわ・・・最後の最後で噛んじゃった）」

今、会話していた内容というのは、収められた税金が誰の手に渡っていたか？というものである。その結果が、5割が文官の懐に行き、3割が朝廷へ、2割がこの城へとなっていた。そして、蜂蜜大好き美羽太郎が自由に使えた額は税金の中の5厘にも満たなかった。

龍蓮

「とりあえず、今月から半年間は今までの税收を3割にまで落とそう。そして、それからは5割にまで引き上げて、税收の安定を図ろう。」

朱衣

「で、でしゅが、その間の足りない分のお金はどうしゅるんでしゅか？／＼／」

あ、カミカミで顔が真っ赤になってる。一応年上なんだけど・・・ギザカワユス。

七乃

「そうですね～そんなことしたら、行き倒れもいいところですよ？・・・ああ、でもヨレヨレになって私に泣き付いてくるお嬢様もいい

ですね♪」

龍蓮

「そこは大丈夫。この間の文官駆逐作戦の時に分捕った財産が余るほどあるから、それで半年間の赤字を補う。それでも、まだ大分余る計算になってるから、その残った分は新政策の為の資金に7割。緊急時の為に残しておくのに3割。これで万事解決じゃないかな。・ ・ ・ね、朱衣？」

朱衣

「ひゃ、ひゃい！そういうことでしゅたら、今のところ問題はないかと・・・」

そう言ったその時だった。ボタン！と扉を打ち破ったかのような轟音と共にオレの背中に衝撃が走ったのは。

未那

「賊が出たそうなんですけど、リュウ君どうしますう？」

龍蓮

「いやいや、軍事担当は未那だろ。」

未那

「あ、そうだ！今、イイこと思いつきました♪」

龍蓮

「思いつかないください。」

どうせ、碌でもないことに決まってる。

未那

「賊はどうやら50人程度らしいんですけど、それに軍を投入するのもメンドーじゃないですか？ですからここは、私とリュウ君の2人で行ったら良いと思うんですよ」

龍蓮

「何が狙いだ。」

未那

「私とリュウ君が背中合わせで戦っている中、周りは敵だらけ。そんな中、私は運悪く敵の内の1人に捕まり私の必死の抵抗も虚しく服を乱暴に破り捨てられる。私は恐怖のどん底の中、声も出せず心の中でこう叫ぶ。『・・・リュウ君！助けて！！』と。すると、なんとということでしょう！私の胸を乱暴に弄っていた賊の男の首が無くなっていたではありませんか。そして、辺りを見渡すと他の賊も既に息絶えていてその場に残るのは私とリュウ君の2人。マジで恋する5秒前！！そして、2人はひとつになれ」

オレは、まだまだ深みに嵌っていきそうな妄想話を打ち切った。

龍蓮

「ちよつと待ったあ！！・・・朱衣が鮮明に想像しちゃったのか意識をどっかに飛ばしてるし、第一！オレはまだ（精神年齢はともかく）子供だ。未那はシヨタコンなのか？そうなのか！？」

未那

「違いますよ。私は、正太郎コンプレックスなんかありません
♪龍蓮君コンプレックスなんです♪」

なんなんだぁー！！この人お！？

七乃

「あのー正太郎って誰ですか？」

そして、疑問をもったのはそこなのか！？

未那

「あーその人ですか？それは、鉄♪」

龍蓮

「わーった！分かったから。賊50人を倒せばいいんだろ！？よし行こう！スグ行こう！」

これ以上、この人に話をさせていては不味いと思ったオレは、未那の手を掴んで会議室を後にした、そして引っ張っていつている道中にも『リュウ君、大胆♪』などという戯言も聞こえてきたが全てを右から左に流し目的地へと向かった。

―孫呉に降り立つ者―紀霊✓

ザシュ！

ザシュ！！

ザシュ！！！！

龍蓮

「任務名、賊70〜80規模を殲滅せよ。完了だな。」

末那

「今回も呆気なかったですね。私としては、もう少し粘ってくれたほうがリュウ君と背中合わせでいれた時間が延びたので嬉しかったかなあと。」

龍蓮

「はあ何をおしゃいますか・・・重いんだけど・・・後は死体を燃やして帰るよ。」

未那

「毎回思うんですけど、何で賊の死体なんか燃やしてあげるんですか？」

と、背中から降りながら（とは言っても、オレの方が身長が低いから地面には足が着いてる状態なんだけれども）聞いてくる。

龍蓮

「死体が腐ると、虫が寄ってくる。その虫たちは汚い。そしてその虫たちがオレ達の生活圏に入ってくる。汚いからオレ達は具合が悪くなる。というのを防ぐのと、死体があちこちにあると情的に悪くなって治安が悪くなる悪循環をなるべく断ち切るためかな？」

ここ最近、100に満たない規模での賊がちよこちよこと出てきている。その討伐には、毎回毎回オレと未那とで出撃している。理由としては、兵を犠牲にしたくないというのとそのほうが行軍速度が早く民にも被害が少なく済むというのが表面上のもので、本当は袁術軍の経験値を稼ぐ機会をなくして例え将来的に孫呉と戦うにしても事を楽に進めるための策だ。この提案をした時は、最初こそは渋られたが未那が賛成すると、この案が通った。まあ、その後「リュウ君は、なんやかんや言いながらも私と一緒に居たいんですよ。」と聞まで引つ張り込まれそうになったのは、あまり思い出したくはない思い出だ。

未那

「へえ、相変わらずリュウ君は物知りですね。ですが、賊を火葬したとなると不満に思う人々もいるんじゃないですか？」

龍蓮

「そういう人には、『呪われて病にならないように燃やすことにより霊をこの世から完全に排除した。気持ちにはわかるけど、今を生きる人たちの命には代えられないから。』……とても言うておけば、多分納得してくれる。」

未那

「うわ、もしかして、七乃ちゃんよりも腹黒だったんですか？ 惚れちゃいますねえ。」

確かに、人心掌握の面から見て多少の嘘っぱいことは言ったけど、何で惚れるに直結する？ 怖いもの見たさで一回だけ脳内を観察してみたいよ。

その後、馬の2人乗りで帰還している間は、未那はずっとご機嫌だった。

―孫呉に降り立つ者―袁術& a m p・張勳✓

とある陽気がポカポカと暖かい日。オレと美羽そして七乃さんの3人は、城下町に出ていた。そのはずなのだが・・・

美羽

「お義兄様へ七乃へ何処じゃへ」

1人迷子になっている美羽。その時のオレは、七乃さんと2人で美羽を探していた。

龍蓮

「美羽へどこ行つたへ」

七乃

「美羽様へ美羽様へ」

龍蓮

「・・・いないな。」

かれこれ30分以上は、2人で探し回っているとは思うんだが・・・

七乃

「どうしましょう。美羽様は馬鹿ですから、知らないオジサンにも

飴玉をもらってしまおうとホイホイついて行かれてしまつかも・・・」

あー確かに。御世話係として色々と教えてきたけど、そういう基本中の基本は流石に教えてなかったからな。ありえる。大いにありえる。

龍蓮

「うーん・・・（こんなことで、警邏隊を出動させるのは袁家の名誉的な意味で不味いと思うし、ましてや兵なんかも絶対ダメだ・・・・そうになると、事態を把握させずに動かせるのは・・・）・・・些か大袈裟な気もするけど、七乃さん！今すぐに動ける細作の数は？」

七乃

「そんなに多くは無いと思いますけど・・・わかりました。任せてください！必ずや、お嬢様を見つけ出してみせます！龍蓮様。」

そう言うと、電光石火の勢いで視界から消え去っていった。七乃さんは、オレが美羽の義兄貴になってからは律儀にも“様”を付けて呼ぶようになった。オレも最初は「何もそこまで・・・」と思ったんだが、彼女が決して譲らなかったので好きなように呼ばせている。

龍蓮

「さてと。何もしないよりは探したほうがいい。・・・もう一度探しに行くか。」

そして、美羽が行きそうな場所を虱潰しに回っていった。しかし、いくら探せども見つからない。それに細作からの連絡が逐一来てはいるが、有力な情報が入ってこない。もしや、完全に外に出たか？と搜索範囲を広げようかと考えていると、ふと美羽の声が聞こえたような気がした。慌てて、後ろを振り返ってみてもやはりいない。・・幻聴だったか。と落胆していると、宿屋の2階から金髪のクルクル頭が一瞬見えた。

龍蓮

「あの馬鹿。本当に知らない人について行ってたのか・・・」

オレは、そう一言だけ呟いて駆け出した。

―孫呉に降り立つ者―袁術✓（+呂霸）

龍蓮

「美羽！」

バン！！と豪快な音を立てて美羽が見えた部屋に侵入した。扉だったものは、既に・・・無い。

美羽

「おお！お義兄様なのじゃ！！そんなに慌ててどうしたのじゃ？」

と、それはそれは不思議そうに首をコテンと傾げて聞いてくる。その姿は確かに愛らしいが、ここは一発ガツンと言ってやらねばならないことがある。

龍蓮

「美羽！知らない人について行っちゃダメだろ！？」

??

「これはすまぬ。この女の子が迷子になったらしかったのでな、誠に勝手ながらこちらで保護させてもらっていた。」

龍蓮

「そうでしたか。こちらこそ迷惑をかけてしまい申し訳ない。我が名は孫？、字は仲然と申します。この度は、私の義妹を保護してくださり感謝します。・・・ところで旅の方とお見受けしますが、お礼と言つてはなんですが、今晚、城に招待したいのですが。」

??

「城？・・・もしか孫？殿は、あの袁術殿の家臣か何かで？」

そう男が、オレに尋ねると一応静かにしていた美羽が無い胸を張って口を開いた。

美羽

「妾が袁術なのじゃ。」

龍蓮

「私は御世話係と内政を担当しています。」

すると男は、ハッと驚いた表情になり頭を下げた。その行動をとりあえず止めさせて、話を聞いてみた。すると名は呂奉勝と言い、何でも主君を探す一人旅に出ているらしい。それで名家の中の名家である袁術の元へ来たのだが、それが迷子になっていた訳である。

龍蓮

「そうでしたか……。では、明日にでも至急、奉勝殿の武官の試験をやらせていただきたいので、そのためには是非、城に招待したいのですが。」

呂覇

「一から十まで済みませぬな。では、お言葉に甘えることにしましょう。」

龍蓮

「それは良かった。美羽もそれで良いよな？」

美羽

「もちろんじゃ！」

その言葉にオレは頷き、

龍蓮

「それでは、こちらへ。」

そして、呂霸を連れ城へと向かった。その後、美羽を今だ発見できていなかった七乃が無事に帰ってきたのを見てしばらく頼ずりをして美羽を離さなかったのはここに報告しておこう。

―孫呉に降り立つ者―諸葛瑾✓

その日の夜。オレと朱衣は城の中庭で今後について語り合っていた。

龍蓮

「ねえ朱衣？」

朱衣

「?・・・何ですか龍蓮様。」

龍蓮

「突然だけど、オレ達（孫呉）の今後（独立までの道のり）ってどうなると思う?。」

朱衣

「た、たわわ／＼／＼・・・わ、わたしゅ達（龍蓮と朱衣）の今後（将来設計）でしゅか／＼／」

オレは、ここで気が付くべきだった。ここからア。ジ。ツ。ユのコメント『すれ違いネタ』もビックリなスレ違いを起こすことになったのだから・・・

朱衣

「わ、わたしゅは、ゆっくり温めて（愛を）いくのが一番妥当だと思うんでしゅけど／＼／」

龍蓮

「うん・・・まあ、それが定石だとは思っけど。未那とかも引き入れてみない（孫呉の仲間に）?。」

朱衣

「（た、たわわ!?初めては2人が良いのに・・・でも、龍蓮様が紀霊さんのことを認めているのも分かってるし・・・でも、でもここで我侂言っちゃったら嫌われちゃうかな・・・うう、どう

しよー）」

理性と自分の欲の狭間で揺れ動く朱衣。本来ならば、こんなところで迷う話ではないのだが。ここで、オレはずっと固まったままにいる朱衣に声をかける。

龍蓮

「朱衣？大丈夫？」

朱衣

「ひゃう！？た、たわわ問題ないでしゅ！え、えーっと紀霊しゃんのことでしゅよね？」

龍蓮

「うん。でもやっぱり難しいよなー（一応、美羽の将だし簡単に裏切ったりは出来ないだろう）」

朱衣

「（！！な、なんだ希望的観測だったのでしゅか。でしたらここで芽は摘んでおくべき！ここは大きく・・・）は、はい！紀霊さんは難しいかと思いましゅ！！！」

龍蓮

「そ、そうか・・・朱衣がそこまで言うんだったら、やっぱりやめとくか（引き抜きを）。」

朱衣

「はい！！（・・・ふう、何とか作戦成功でしゅ）」

オレは、朱衣の並々ならぬ威圧に押されながらも朱衣の意見に合わせる。　　っていうか、いい加減気付けよ！　by 天の声

龍蓮

「ま、とりあえず、暫くは大人しくしてるから、時期が来たら頑張ろうな。」

朱衣

「（たわわ／＼／＼）はい！」

今の返事をした朱衣の顔は輝きすぎている。それは、ハ「暫くは大人しく」↓「まだ、精通も来てないから閨を共にしない」。『時期が来たら頑張る』↓「精通が来たら子作りを“一緒に”頑張ろう」↓「という勝手な妄想からくるものである。」

龍蓮

「じゃ夜も更けてきたし、明日は奉勝殿の試験の対戦相手をしなくちゃいけないから、オレは寝るよ。」

朱衣

「はい。・・・お休みなしやい／＼／」

龍蓮

「おやすみー」

そう言つて、オレはその場から立ち去る。そして、取り残された朱衣の口からは人生の未来予想図（という名の妄想）がベラベラと溢れ出す。

朱衣

「たわわ、どうしましょう／＼／まず暫くは〴〵そうですね・・・今ある房中術の書をまた一から読み直すべきでしゅね！それと新しい房中術の書もあったほうが良いでしょうか？それを〴〵2年くらいの間に関わらせて・・・そこからは2年から3年の間隔で赤ちゃんを・・・たわわ／＼／・・・な、何人が良いかな／＼／ぶ、無難に3人？いやいや、ちよつと頑張つて10人？たわわわわ／＼／」

頑張りすぎです。

朱衣

「はっ！でも、この大陸が平和にならないと安心して子育てどころか子作りもできませんね・・・。うん！そのためにも早く孫呉を立て直してこの大陸に平和を齎しないと・・・はう10人か」

結局、10人なんですか。

朱衣

「・・・私も寝ようかな。」

そうして2人の会話は噛み合うこともなく、終わりを迎えたのであった。その日の夜から朱衣の部屋から「はうう………10人かあ？」という寝言が聞こえるようになる。

―孫呉に降り立つ者―諸葛瑾& a m p・袁術& a m p・張勲& a m p・紀靈√（+呂霸）

翌日。

今日のイベントは呂霸の試験だ。と言っても、美羽や七乃さん、未那をはじめとする者達の前でオレが呂霸と模擬戦をして実力を見る。という至って簡単な内容だ。そんなことよりもオレには気になることがひとつある。それは……

龍蓮

「朱衣どうかしたの？」

朱衣

「ひゃう！？だ、だ、大丈夫でしゅよ／＼」

これが今朝からずっとなのだ。顔も赤いし、熱でもあるのだろうか？
だからいい加減気付けよ！ by 天の声

場面を戻して場所は中庭。時はもう少しで正午というところ。そこで、オレ孫仲然と呂奉勝は対峙していた。しかし、どちらも模擬剣、模擬反魔では僅か3合しか打ち合えず、急遽オレの得物を送ってもらうこととなった。そして、再戦の日。

美羽

「お義兄様頑張ってたも」

七乃

「美羽様に応援されている龍蓮様。羨ましいですね」

朱衣

「龍蓮様頑張ってくださいい！！たわわ・・・」

未那

「リュウ君、大好き！！」

約2名の声援(?)は無視。

呂霸

「そんな細長い武器は初めて見ますな。」

龍蓮

「これは大太刀という武器です。名は贅殿遮那。舐めてもらっては困ります。」

呂霸

「そんなつもりは元からありません。孫？殿の實力は、この間の打ち合いの際に十分確認済みです。それほどの武をお持ちなのであれば、相手に不足はありません。……呂奉勝参る！」

ガキイイン！！（バチイイ）

オレの“袁術親衛隊正式採用鋼剣”と呂霸の“煌黒堅鎚・亜流雌蛇”が火花を散らしてぶつかり合う。

ガキイイン！ガキイイン！ガキイイン！……ガキイイン！
！！（バキッ）

さらに数度、打ち合うが、所詮量産型の袁術親衛隊正式採用鋼剣が折れる。それを好機と見てか呂霸が一気に間合いを詰め、

呂霸

「ハアアッ！！！」

煌黒堅鎧・亜流雌蛇をオレの頭上に振り落とす。・・・が、その時に背にある鞘から贄殿遮那を抜刀し、その勢いそのまま呂霸を斬りつける。

龍蓮

「もらったあ!!」

呂霸

「グッ?!」

しかし、振り落としていた煌黒堅鎧・亜流雌蛇を途中で止めバックステップをとる。それにより贄殿遮那は服のみを掠ることとなった。

呂霸

「はあああ!!・・・もう少し孫?殿の腕が長かったら死んでいたでしょうな。」

龍蓮

「こつちもあのまま反魔を振り下げられていたらペシャンコだった。」

双方、言いたいことを言い終えるとまた打ち合いを始める。しかし、先程のような打ち合いではなく、相手の攻撃を流すことを重点に置いているようだ。それがどちらもヘトヘトになるまで続けられる。そんな緊張感の中、観戦している人もその空気に飲み込まれてしま

っていく。

それから、何合打ち合っただろうか。どちらも既に満身創痍。もはや気力と意地のみで互いの得物を振り上げているようなものだ。それでも周りの緊張感は衰えるどころか上がっていく一方だ。すると、どちらからともなく声をかける。

龍蓮& a m p・呂霸

「次で終わらせる！（最後！）」

そしてオレは鞘に贅殿遮那を、呂霸は煌黒堅鎚・亜流雌蛇を上段の構えを見せる。

龍蓮& a m p・呂霸

「ハッ！！！！」

掛け声と共に2つの影が動く、そして！片方の影が地面に倒れる。

龍蓮

「峰打ちだ。」

―孫呉に降り立つ者―袁術✓（＋呂霸）

美羽

「喜ぶのじゃ〜呂奉勝を妾の親衛隊に任命するのじゃ。」

嵐

「誠に勝手ながら、辞退させていただきます。」

話は前回の話の最後に遡る。

それは、オレの贅殿遮那が嵐の峰打ちに決まった後のことだった。
あの一撃を受けて気を失っていた嵐を医務室へ連れていき、目が覚めたときの話である。

嵐

「・・・知らない天井だ。」

龍蓮

「医務室だ。ところで奉勝殿、具合のほうは大丈夫か？」

と、聞くと首を立てに振った。そして、

嵐

「これからは嵐と呼んでくださらぬか。」

龍蓮

「では、嵐殿も龍蓮と」

嵐

「いや、口調も普通に崩してくださってよい。何せ、龍蓮殿は我が主となる御方なのだから・・・」

そんな、会話がなされていたのだった。

美羽

「なぬ？妾では不服と申すのか？」

龍蓮

「いやな、そういう訳じゃないんだけど・・・実は嵐はオレに仕えたいって言うててな、もちろん今回は美羽に悪かったところはないんだけど、オレと美羽を比べると・・・オレの方が主君として優れているかな？みたいな。」

美羽

「な〜んじゃ！そうだったのか！・・・うむ、お義兄様に負けるの

は仕方のないことじゃ、呂覇好きにするが良いぞ」

こうして、オレ直属の武将第1号が誕生した。だが、この嵐は暇さえあると勝負を仕掛けてくる。武人として自分より強い人間がいて悔しかったのか、それとも嬉しかったのか？おそらく後者だと表情からしてそう推測できるが、まあ7割方勝っている……すまん、少々盛った5分5分だ。

――孫呉に降り立つ者――諸葛瑾✓

ある日の晩。オレは朱衣をオレの部屋に呼んでいた。（呼んだだけです。）

朱衣

「（たわわ……何されるのかな／＼も、もしかして……いきなり『ガバア』っとなあ……その後はそれはもう獣のように／＼）」

ナニをされることを前提にしている朱衣。早くも朱衣ワールド全開

の妄想である。・・・誤解が発生しないように大事なことからもう一度記しておく。

（呼んだだけです。）

龍蓮

「この前に話したあれだけどき。もう少し考えたんだ。」

朱衣

「（あ、子供は最低でも10人欲しいっていう話でしゅね。）」

それは、あなただけです。・・・てか、最低10人になったのですか？

龍蓮

「多分しばらくしたら混沌とした時代が来るだろ？」

朱衣

「（た、確かに・・・龍蓮様が今よりも大人になってもっとカッコよくなったら競争率が今の何倍にも跳ね上がる。・・・うう、今でも十分高いのになあ。雪蓮様や蓮華様、小蓮様だって姉弟のクセに諦めてくれそうにないし、それに一番厄介な。。ちゃんだって・・・）はい。」

龍蓮

「だからさ、平和なうちに有能な人材を集めて回りを固めておこうと思って。」

朱衣

「（有能な人材でしゅか……あ！嵐さんみたいな人で身の回りの防御を強くしておくっていう寸法でしゅね。）それはいい考えだと思いましゅ！！」

龍蓮

「でしょ！？もちろん冥琳や穩も良いけど（軍師として）、この大陸には隠れた人材がたくさんいるからなあ。」

朱衣

「（たわわ！？わたしゅは盛大な勘違いを！？龍蓮様もおっぱい勝ち組が良いのでしゅか！？そうなのでしゅか！？しかも冥琳様や穩さん以上のおっぱいを更に求めるとは遺憾でしゅ！！で、でもここで怒ったら私がおっぱい小さいこと気にしているみたいになっちゃうしなあ。一体どうしゅれば……）」

それはもう気にしてるんじゃ……っていうか、それ激しく食い違いだからね！？

龍蓮

「あ！も、もちろん朱衣も良いと思うよ（軍師として）！」

朱衣

「……本当に……本当に！私（みたいな小振りなおっぱい）でも良いんでしゅか！？」

龍蓮

「当たり前だよ！」

朱衣

「（そう、そうだね！私だって、張り・感度・揉みやすさの3点なら誰にも負けない自身があるもん！）そうでしゅよねゝエへへ／／」

レインボーブリッジ（朱衣の妄想回路）封鎖できません！！

龍蓮

「ね、明命！」

??

「はうあ！？」

部屋の天井から『ガタン』という音と共に人間が落ちてきた。

―孫呉に降り立つ者―周泰& a m p ; 諸葛瑾✓

明命

「な、何で分かったのですか？気配は完全に消していたつもりだったのですが。」

龍蓮

「生きているんだから完全に気配を消すなんて無理だよ。それに朱衣に一瞬だったけど殺気を向けてたし。」

明命

「はうあ！？む、無自覚でした・・・」

それはある意味キツイ言葉だよ？明命ちゃん・・・

朱衣

「たわわ、な、何でいるんでしゅか？明命ちゃん。」

明命

「私は雪蓮様に龍蓮様の様子を探るように命じられましたから。それよりも何故、こんな時間に龍蓮様のお部屋にあなたがいるのですか？朱衣ちゃん。」

そう言う2人の間には、確実に青い火花が飛び散っている。うん・
・普段は仲良しなのにな。

龍蓮

「はいはい！仲良くしないと廊下に立ってもらつよ。」

朱衣&mp;明命

「し、静かにします!!」

既に、その返事の声が大きいのだが・・・それは言うまい。

龍蓮

「ところで明命。さっき姉貴にオレの様子を探るよう言われてきたって言ってたけど。」

明命

「あ、はい。袁術さんの城下町が最近になって急に栄えてきているっていう報告を受け、雪蓮様が『これは、リュウが何かしたわね。ちょっと明命見てきてくれる?』と、おしゃったので。」

何ともまあ、ちょっとお隣さんに旅行に行ったときのお土産分けてきてあげてみたいなノリで言うもんだな。

龍蓮

「ってことは、オレが何したかを明命に報告すれば明命の任務は無事完了っていう訳ね?」

明命

「はい!そういうことになります!」

以下が明命に渡した報告書の内容を簡単に纏めたものである。

- 1 腐った文官の排除
- 2 上記の文官の財産没収及び追放
- 3 半年間、税収を7割自粛
- 4 半年後からは5割にまで戻す
- 5 街を四等分し、警備隊を設立
- 6 軍部の縮小路線に変更
- 7 少数の賊には紀霊と自分に対応
- 8 孤児院の設立
- 9 孤児院の子供に自分が簡単な教育
- 10 自分が民と交流

の10点で以上だ。

明命

「ここまでやると、孫呉の復興の障害になりませんか？」

龍蓮

「孫呉が復興するとき民が元気じゃなかったら、その後に周りに気を張りながら内部にも神経を尖らせないといけなくなるから、こっちはまず民を元氣にしてそれを行なったのは実質オレっていうのを流して、復興時には反発が最低限になるようにしてみた。それに若い世代をちよつと言いは悪いけど自分色に染め上げることによつて、今後の人材にも困らないように頭の良く忠誠心の強い仲間となる種を植えてみた。」

朱衣

「そ、そんなところにまで考えて行動していたというのでしゅか？」

龍蓮

「まあ・・・そうなるね。」

うん、何故か微妙に罪悪感が湧くのは何故だろう。

??

「わあゝ！！敵の本陣のほぼ真ん中で反旗を翻す策を話している超絶腹黒なりユウ君もいつもと違う味を出していていいですねゝ」

マズイ・・・ある意味一番厄介なのに見付かった。

―孫呉に降り立つ者―周泰& a m p ; 諸葛瑾& a m p ; 紀靈✓

未那

「その話、私にももっと聞かせてください。」

既に明命は魂切を手にかけている。朱衣に至っては顔を青ざめているだけだ。

龍蓮

「いや、無理だから。」

未那

「何ですか？私はもうここまで聞いちゃったんですし、いいじゃないですか♪」

その発言にオレは、額に手を当てる。これを計算でなく天然で言っているから未那には困る。

龍蓮

「だからさ、仮にも未那の主は美羽なんだからさ。どうにかして、この状況を美羽に報告したりとかしないの？」

未那

「え？して欲しいんですか報告。リュウ君がどうしてもして欲しいならしてあげてもいいですk」

龍蓮

「頼むからしないで!!」

遮るようにして頼み込む。

未那

「もちろん最初からそのつもりですよ。だってそんなこと言ったら私が美羽様に斬られちゃいますよ。」

と、そこまで言うと急に未那の顔が思考顔になる。

未那

「リュウ君。今のこと美羽様に報告されたらマズインですよね?」

龍蓮

「まあ、ね。」

未那

「でしたら、口止め料くらいは貰えますよね。」

龍蓮

「無理じゃない程度ならいくらでも出す。あ、無理なもの例としては、夜空に光っているお月様をとってきてくれとか。」

未那

「そんなものは要りませんよ。あんなものがあつたって、仕方ないじゃないですか。それよりも私が今一番欲しいものがあるんです。」

龍蓮

「それで何?」

未那

「まあ、簡単に言うと“時間”なんですけど・・・」

そんなもんは無理だ。その時はオレもそう思った。けど、相手が未那である事を忘れて貰っちゃ困る。

未那

「等価交換です。私の人生半分あげますからあなたの人生半分ください。」

龍蓮

「ほんとバカだな。半分どころか全部あげるよ。」

あ、流れでやってしまった。そして何故か明命の魂切がオレに向けられている。更に朱衣も真っ青な顔から無表情に変わり絶対零度の視線を向けてくる。

龍蓮

「こ、これは作者が悪いんだ。」

しかし、弁明は受け入れられず。

朱衣&明命

「「言い訳無用です!」」」

龍蓮

「不幸だあああ！！！！！！！！！！」

未那

「そんなに目くじら立てないでくださいよ」冗談ですってば、冗談」

龍蓮

「いや、末那が言ったら冗談に聞こえなかったから。」

未那

「まあ、リュウ君との時間が欲しかったのは本当ですけどね。」

今回はどうやら真面目？普通？な内容になりそうだ。

龍蓮

「逢引？明後日なら一応空いてるけど・・・」

未那

「いえ、私の初めてあげますからあなたの初めてください。」

余りにもサラッと爆弾を投下しやがった。お陰様で誰一人として瞬時に反応できなかった。

朱衣

「あ、あのそれってどういう・・・」

未那

「あれ？もうちょっと分かりやすく言った方が良かったですか？なら、私にリュウ君の子供ください」

明命

「はうあ！？」

未那

「ですから！私を抱え」

そこで言葉が止まった。いや、この場合止めざるを得なかったというのが正しい言い回しだろう。何故なら、

明命

「訂正・・・いえ、撤回してください。」

未那

「あ、あの～これはどういう・・・」

何故なら明命が瞬時に未那の背を取り、魂切を構えていたからであ

る。そしてその刃は首元にピタリと置かれていた。この雰囲気は普段の“お猫様好きの明命”ではなく“必殺仕事人の周幼平”である。

明命

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言！尚のこと恐ろしい。

龍蓮

「あ！子猫だ！！」

明命

「お、お猫様！？ど、どこですか！？私のお猫様は一体どこに！？」

龍蓮

「ほ、ほら！西に五里、南に三里行ったところにお猫様の隠れ里が・
・・」

明命

「今スグ行つてまいります！！」

ピューー！！といった感じの効果音が相応しい勢いで走り去っていった。よし、これであと二人だ。これなら何とかこの場を上手く纏められるかm

朱衣

「りゅうりえんしゃま！あ、あの時のことびやはうしよだったの
しゅか？」

『日本語訳：龍蓮様！あ、あの時の言葉は嘘だったのですか？』

あゝ前言撤回。ダメだこりゃ。

龍蓮

「あの時って一体なんのことかな？」

朱衣

「あ、あんたたいしえつなおひやなしをわしゅれたことにしゅるな
んてひどいでしゅ！！！」

『日本語訳：あ、あんな大切なお話を忘れたことにするなんて酷い
です！！！！』

そんな大切な話なんてしたことあったかなーと脳内のCPU使用率
を100%にして思い出そうとしているオレ。だが、しかし！そん
な朱衣の脳内で改ざんされた記憶を有している訳がなかった！！

朱衣

「ひよ、ひよんとうにおびよいでないんでしゅか？わたしゅたちの
しょうらいしえつけいのひやなしを・・・」

『日本語訳：ほ、本当に覚えてないんですか？私たちの将来設計の
話を・・・』

龍蓮

「お、覚えてるよ？（な、何だったっけ？）」

朱衣

「よ、よきやつたでしゅ。もし、こじゅくりしやいていじゅーにはぎゃんびやるきよとをわしゅれたときやいわりえたら・・・いましゅぐきょーしえいてきにこじゅくりをはじめりゅときよろでしゅた。」

『日本語訳：よ、良かったです。もし、子作り最低10人は頑張ることを忘れたと言われたら、今すぐ強制的に子作りを始めるところでした。』

龍蓮

「（な、何言っているのか分かんねー）そうかそうか。部屋まで送ってあげるから、もう寝なよ？」

これで、残るはあと1人。

朱衣を部屋にまで送ったあと、部屋に戻ると未那が消えていた。しかし、布団が妙に膨らんでいるのが見えた。その光景に1つため息を吐くと、掛け布団を引き剥がした。

龍蓮

「はうあ!？」

し、しまった。あまりの衝撃に明命のセリフを盗ってしまった!？

未那

「うーん・・・なんですかあ？夜這いですかあ？そうですかあ・・・ではどうぞお？」

そして、布団の中に引き込まれる。一糸まとわぬ姿の未那によって・
・

龍蓮

「あ、当たってる」

未那

「ふふ、当ててるんですよ」

龍蓮

「そっいつのは、最低でもあと数年先にしてくれよ!？」

未那

「分かりました♪数年まで待てば良いんですよね？」

龍蓮

「あ、口が滑った・・・」

未那

「では、今日のところは大人しく寝ますね」

そして、そのままの姿で纏わり憑かれる（誤字ではないのであしからず）。

龍蓮

「嬉しいような・・・悲しいような・・・」

未那

「あれ？今、嬉しいって言いました？」

龍蓮

「おやすみ」

三十六計恍けるに如かず。

―孫呉に降り立つ者―顔良&文醜&荀?√

とある夏日の袁家訪問。

いきなりだが、オレは袁紹の治めている城下町まできていた。まー簡潔に言つと美羽が行きたくないって駄々をこねたから結局オレが行くことになった。

そして、何故かトラブルに巻き込まれている。

酔っ払いのオツチャン

「よお！よお！兄ちゃん！！・・・ヒック！自分からぶっ、ヒッ、っという何もなしはねえんじゃねーの？」

龍蓮

「いやいや、ぶつかってきたのは貴方でしょう・・・」

いやね、酔っ払いに何を言っても無駄なことくらいは知ってるんだよ？でも、言っておかないといけないような気がしたんだよ。

酔っ払いのオツチャン

「ああん！？文句、ヒッ、っでもあんのか！？」

それから、二言三言の会話（？）が続いたが、その内の何処かにプチンときたのか、殴り掛かられる。

龍蓮

「はあゝ」

この「はあ」は何かって？勿論、氣を溜めている掛け声ではない。じゃ、普通に溜息？それも否だ。正解はきちんと発動しなかった欠伸だ！！

オレのそんな態度に向こうも、とうとう酒屋のもの（机やら椅子やら）を投げ出し始めたが、それをことごとく受け取り自分の隣に置く。傍から見れば大道芸の流れ作業に見えるかもしれない。（それはない。）

??

「うつわー・・・なあなあ斗詩！あそこで大道芸やってるぞ？」

??

「・・・はあ。文ちゃんそれは違うと思うけど・・・」

??

「そうかなー？あたいは大道芸にしか見えないけどなー」

残念ながら、そんな残念な勘違いをしてしまう者も野次馬の中にはいたらしい。

龍蓮

「その武人！・・・よつと。もしかして、袁紹殿の・・・さつと。文醜と、わつと。顔良かい、つと。」

??

「うわーやっぱニイチャン器用だなー・・・ん？何か言ったか。」

顔良

「はい。私が顔良ですけど、どちら様ですか？」

龍蓮

「えーっと、しゅっと。袁術客将孫策の弟、せっと。孫仲然です、つと。今日は、美羽の代わりに袁紹殿に会いに来ました、つと・・・いい加減しつこいぞ、おっちゃん。」

そう呟いた瞬間には、既にオツチャンの意識はいつの間にか回り込んだ龍蓮の手刀により刈り取られていた。その速さは、少なくとも“某フライングさん”よりは確実に早かったであろう。

文醜

「へえー！ニイチャン、大道芸の人じゃなかったんだなー」

龍蓮

「一応、オレも武人だし・・・それに、ニイチャンって呼ばれるほど身長も高くないし、それに年だって近いんじゃないの？」

文醜

「武人なのか！？じゃあ、あたいと一回やらないか？・・・あ、言つとくけど、あたいが閨でやるのは斗詩だけだからな！」

顔良&龍蓮

「ぶ、文ちゃん／＼／＼」「いや、誰もそんな解釈しないから・・・」

そんなことを白昼堂々と宣言しなくても良い。っていうか、するな！・・・斗詩が可哀想だ。

そんなことを思っていたら、もう一人、めんどくさ・・・ゲフン！ゲフン！・・・あゝじゃなくて、そうだなーうん。とっても独創的？人とは違う思考を持った人？？あ、そうか！頭のネジのどこかが歪んでしっかりとはまっていけない人が来てしまった。

??

「顔良！文醜！！というより、専ら文醜！！！！あんたねえ、いつになつたら仕事を終わらせる気？」

ここに来てのからの猫耳軍師襲来だ。↑ということで、もう名前を出してもいいでしょう。

荀？

「口笛吹いて知らん顔するんじゃないわよ！！！」

龍蓮

「えーっと、君も袁紹殿の者？」

荀？

「・・」

「

これが、5歩？いや、10歩程の距離が開いていたはずの男が急に目の前に現れた時の荀？の反応である。それ以前にも視界にすら入っていなかったのかもしれない。そして、荀？が急に自分の目の前に現れたイケメンにときめいちゃって言葉が出ないわけでは決していない。断じてない。

龍蓮

「??あ、あのさ」

荀？

「・・・・・・・・・・・・・・・・キ」

龍蓮

「き？」

荀？

「キヤアアアアアアアア！！！！！！?????」

あまりの悲鳴に思わず後ずさるオレ。その尋常じゃない悲鳴に街の人からの注目を一点に浴びる羽目になった。ついでに言うと、文醜と顔良は頭を抱えている・・・否、文醜は腹を抱えて笑っていたが。

荀？

「こ、これ以上近づかないで！話さないで！いつそ消えて！死んで！汚され（ry」

【ここから先は、苟？の暴言罵倒が続きます。こんな汚い言葉は作者には書き表せません。よって、皆様の脳内妄想等でお済ませください。】

よって、オレは投獄された。使者としてきたのに何故？

―孫呉に降り立つ者―顔良✓

獄中にて・・・

斗詩

「龍蓮さん。ご飯持ってきましたよ。」

龍蓮

「毎回毎回ありがとう、斗詩。」

いつの間にやら真名で呼び合う仲になっていた！斗詩としては、謝罪みたいな意味で、龍蓮としては感謝の意味で。・・・実はあれか

ら1週間、斗詩は毎食自分で作った料理を持ってきてくれている。それ以外にも、龍蓮を獄から解放するために袁紹に何度も掛け合うとしているのだが、荀？の策・・・もとい邪魔や嫌がらせの性もあり、まだそれには至っていない。

斗詩

「ああ、そうでした。龍蓮さんが持ってきた袁術様からのお断りの手紙は何とか麗羽様に渡せましたよ。」

龍蓮

「何から何までありがとう、斗詩。あと、オレの武器とかも持ってきてくれると勝手に牢を壊して脱獄して帰れるんだけどなあ・・・いただきます。」

ガツガツガツ・・・

斗詩

「はい、召しあがれ。・・・ごめんなさい。荀？さんが何処かに隠してしまつて今すぐには返せません。今、部下に探させているのでもう少し待つてください。」

龍蓮

「ああ、ごめんね？急かしてる訳じゃないんだけど、早く帰らないと美羽が泣くと思うんだよね。」

ガツガツガツガツ・・・

斗詩

「はい、お茶です。」

龍蓮

「ありがとう。」

フーフー・・・ズスー

タツ・・・タツ・・・ダダダダダッ

兵士

「顔良様！」

何やら、ただ事ではない並々ならぬ様子で1人兵士が入ってきた。

斗詩

「何かあったんですか！？」

兵士

「はっ！現在、投獄されている。孫仲然なる者を直ちに釈放せよ・・・との命令です。」

斗詩

「良かったですね、龍蓮さん。」

龍蓮

「良かったけど・・・もしかして、美羽・・・袁術のところから何か届いたの？」

兵士

「はっ！袁術様ご本人と、側近の張勳様。騎馬隊5000とそれを率いる紀霊様、呂霸様が来ました。」

龍蓮&斗詩

「・・・・・・・・」

あまりのスケールの大きさに、ただただ啞然とする2人。袁紹を苦手とする美羽が龍蓮のために此処まで来るということの意味を考えて欲しい。それだけお義兄様のことを大切だと思っているということだ。

そして、投獄から1週間。やっと解放された・・・

――孫呉に降り立つ者――袁紹&顔良&荀？&袁術&張勳✓

袁紹

「おーほっほっほっほ・・・美羽さん？口ではイヤイヤと言っておりましたけど、結局来たんじゃありませんか！」

美羽

「本当は妾だって来とうなかったのじゃ！！でも、お義兄様が中々帰ってこなかったから迎えに来たら、麗羽姉様のおバカな部下が妾のお義兄様を牢に閉じ込めたと聞いて妾は・・・妾は・・・うう」

袁紹

「う？」

美羽

「う、う・・・ふ、ふええええん！！！！！」

袁紹

「美羽さん！？どうしましたの！？ど、どなたですか！？美羽さんを泣かした方は！！今すぐ、頸を叩ききつてあげますから、もう泣かないでくださいな。」

その言葉に、物凄く青ざめた顔をしている荀？。それもそうだろう。何故なら、彼女が龍蓮を勢いに任せて投獄したおかげで、美羽・・・袁術が部下と騎馬隊5000などという馬鹿げた規模の兵を動かし、云わば脅しをかけに来ているからだ。まあ、実際にはそんな考えなど無しに飛んできたのだが・・・

龍蓮

「えーっと、斗詩？袁紹さんが・・・うん。まあ、こういう人だといふことは分かった。で、どうすれば良い？」

斗詩

「とりあえず袁術様をどうにかするしか・・・」

龍蓮

「まあ・・・それはオレがやるしかなさそうだな。」

斗詩

「はい。」

だって、七乃は目を輝かせて「いつもの根拠もないのに自信満々なお嬢様もいいですけど、泣いてるお嬢様もとっても素敵ですう」などと言っているところからみても、美羽を慰めれる人材はオレしかない。

龍蓮

「美羽。おいで」

美羽

「おにいさま あああ」

龍蓮

「よしよし。ありがとな」美羽。美羽が助けに来てくれて嬉しかったよ」

美羽

「ほ、本当かの？」

龍蓮

「そうそう。美羽は良い子だから、泣かなくていいんだよ」

美羽

「妾は良い子かの？・・・うむ！妾は良い子！良い子じゃからもう泣かないのじゃ！」

さつきまで号泣だったのに、すぐに満面の笑みに早変わりだ。

斗詩

「（流石ですね。龍蓮さん。）」

龍蓮

「（まあね。）」

斗詩

「（良い父親になりそうです。）」

龍蓮

「（うつ・・・褒め言葉としてもらっておくよ。）」

美羽

「うむ！うむ！それで、お義兄様？妾のお義兄様を牢屋に入れたという不埒な輩はどこなのじゃ？」

龍蓮

「あ、え？ああ、この子。」

と、龍蓮に指を指されると“ビクン”と体を反応させた荀？。

袁紹

「あら、荀？さん。孫・・・なんとかさんを牢屋にぶち込んだのは貴方でしたの？・・・では、美羽さん。今すぐ、荀？さんの頸をお渡しますので今回は許してくださいな。」

美羽

「うむ！妾は良い子じゃからな！それで、許すのじゃ！」

荀？

「（ガタガタブルブルガタガタブルブル・・・）」

龍蓮

「まあまあ、美羽。・・・実を言うとな、今オレの仕事の量がハンパないんだ。」

いきなり始めた脈絡のない話に首をコテンと傾げる美羽。そして、悶える七乃・・・は、やっぱり触れないでおく。

龍蓮

「それに今回の件で、また仕事も溜まっちゃったと思うし・・・袁

紹さん。」

袁紹

「な、何ですか？」

龍蓮

「荀？の頸を胴体から切り離す前に譲ってはもらえないだろうか？」

袁紹

「お、怒ってはいんですの？」

龍蓮

「美羽を泣かせたことは怒ってるさ。」

袁紹

「でしたら、」

龍蓮

「（王佐の才を野放しにしておくのは危険だし、曹操に渡してやるわけにもいかない。となったら、舞台から退場してもらうか、味方に引き入れるまで・・・やっぱり、荀？の才は上手く活用したい。という訳で、ここは引き込むに限る。）でも、今は殺さないで、彼女の嫌いな“男”であるオレの下で働かせたほうが、よっぽど罰としては相応しいと思うんだけど・・・」

その説明に満足したのかはわからないが、袁紹の首は縦に振られた。

袁紹

「それで、良いですね。荀？さんも良いですね？」

荀？

「（ガタガタブルブルガタガタブルブル・・・）！？（コクン！コクン！）」

うーん。荀？はちゃんと話は聞いていたんだろうか・・・それは甚だしく疑問だが、袁術陣営に帰属することになった。

斗詩

「（龍蓮さんも人が良いですね。）」

龍蓮

「（ん？そうでもないよ。それに結構人気のあるキャラを殺したら、数少ない読者様から見放されるかもだし。）」

斗詩

「（そういうメタ発言はやめてくださいよお。）」

そういう貴方もやめてください>>

―孫呉に降り立つ者―袁術&・張勳&・紀靈&・
諸葛瑾&・荀?√(+呂霸)

オレ、孫仲然、只今16歳は、ある道を進むことを決心していた。

龍蓮

「じゃ、朱衣と文若は一足先に姉貴のところに戻つてくれ。」

朱衣

「は、はい。わかりました。」

荀?

「ふん!そつ何度も何度も言われなくても分かつてるわよ!」

流石、ツンデレ比率10:0の文若だ。

美羽

「お義兄様ああ」

七乃

「ああ、美羽様の泣いた顔も素敵ですう。」

龍蓮

「美羽。暫く会えなくなるんだから、笑った顔を見せてよ。そして七乃は、雰囲気をぶっ壊すな。」

未那

「・・・えぐ、ぐすん。あなた、いつてらっしゃ・・・うわーん！
」

突然、号泣の未那。そして今「あなた」って、龍蓮のことを今「あなた」って呼びましたよね！？まさか、この数年の内に・・・

龍蓮

「・・・ド突いて良い？」

未那

「・・・テヘッ
」

違いました。いつもの未那の暴走でした。皆様、勘違いさせてごめんなさい。

未那

「あ、でも・・・リュウ君でしたら突いてくれても構いませんよ、口でも、下の口でも？あ、モチロンおssh」

シャキン!!

龍蓮

「さてと、どの口を塞げば良いんだ？」

未那

「あら、やっとその気になってくれました？でしたら私は初めてです、まずは胸でも愛撫してもらって十分過ぎるくらいに濡れてきた」

龍蓮

「言い方が悪かったみたいだ・・・誰かある！猿轡を持って来てくれ！」

未那

「はっ！？私は、私はとうとうリユウ君を本気にしてしまいましたか。猿轡で口を聞けなくした後で縄で私を縛り上げ、抵抗がでなくなつたところであんなことやこんなことを・・・」

もはや収集不可です。きっと龍蓮がどんな言葉で返しても未那はそつちの方向へ捻じ曲げてしまうことでしょう。

朱衣

「ぶはっ!!」

朱衣！？その鼻血を出す役は君じゃないよ！？

美羽

「うみゆ？一体どうしたというのじゃ？」

ああ、美羽。君だけは純朴なままでいてくれ・・・

嵐

「龍蓮様。三十六計逃げるに如かず・・・行きましょう！」

龍蓮

「残った面子じゃ絶対収集つかないけど・・・ドロン！」

そう言つて煙玉を投げ、その煙が晴れたときには既に龍蓮と嵐はいなかった・・・

―孫呉に降り立つ者―No√（+呂霸&鳳凰）

オレは、軍師回収の計を実行する旅を始めていた。（詳しくは上記キャラクター紹介へ）

そして、まず始めに水鏡塾に在るであろう臥龍・諸葛孔明と鳳雛・鳳士元の元を訪ねる道中であつた。そして・・・

嵐

「ん？・・・龍蓮様！」

龍蓮

「村が騒がしいな。行こう！」

嵐

「了解です!!」

今日はこの辺の村に泊めてもらおうと思つていたオレ達は、その宛に在つた村が賊に襲撃されてゐるのを目撃し、賊を蹴散らすために馬を飛ばした。

鳳凰

「やあやあ我こそは、荊州襄陽郡の鳳朱雀!!血に飢えた賊共よ!もう2度とこの地を踏めない体にしてやる!!」

賊頭

「相手は餓鬼1人だ！恐るこたアねえぜ全軍突撃だア！！！」

賊共

「「「「「オオオオオオ！！！！！！！！！！」」」」」

賊の頭の激で突撃してきた賊の数は約700。それに対して村の防衛軍は鳳朱雀のただ1人。絶体絶命とはまさにこのことである。

無鉄砲に突撃してくる賊の軍勢を一気に2、3人振り払うと更に5人が突撃してくる。しかし相手は700。その隙に横を通られ村を襲撃する者、また後ろに回り込んで包囲する者など、とてもじゃないが手に負えていない。

鳳凰

「（うう、僕だけじゃ流石に適わないよ・・・）まだまだあ！！！」

賊A

「何ッ！？・・・《ズシャ！！》ウワアア！！！」

賊B

「クソオオ！！・・・《ザシュ！！》グフッ！！！」

賊C

「ヒーハー！！！！・・・《ザク！！》ウガア！！！」

次々にやられていく仲間焦りの表情が見えてきた残っている賊や

龍蓮

「チエストオオオ!!!」

ひとつの掛け声で賊10人強が天に舞う。

嵐

「ちえ、ちえすとぉー（“ちえすと”って何ですか・・・）」

こちらも負けずに10人弱。

龍蓮

「嵐！まずは賊の頭を討ち、10程残して壊滅させるぞ！」

嵐

「御意！」

そこから早いこと早いこと。2人の前には誰もいないという風に
どンドン前に進んでいく。賊が何人束になってもすぐにその賊は消
えている。その光景に賊は散り散りになって逃げていく。

賊頭

「野郎ども！俺を守れエエ！！！」

しかし、すでに賊頭の周辺には誰もいない・・・否、ひとり、ふたり・・・さんにん。

龍蓮& amp; 嵐& amp; 鳳凰

「来世は誤るな。」「死んで詫びろ。」「覚悟！！！」

そして、鳳凰の一太刀で賊頭の頸と胴体は永遠に別れた・・・

鳳凰

「助太刀ありがとうございました。」

龍蓮

「どういたしまして。」

鳳凰

「僕は、姓が鳳。名が凰。字が朱雀です！」

そう言ってペコリと頭を下げた。その光景が何とも微笑ましく感じられる。

龍蓮

「オレは、孫仲然。隣が呂奉勝。それで、村人は？」

鳳凰

「大丈夫です。女性と子供を御役人様の館に避難させ、回りを大人の男に守らせてます！」

龍蓮

「そつか。なら良かった。」

鳳凰

「はい！」

とてもさっきまで賊と殺し合いをしていたとは思えない笑顔だ。

しかし、そこで今まで黙っていた嵐が口を開く。

嵐

「それにしても、良く役人が民草を館に入れましたね。」

鳳凰

「ぐっ！？そ、それは・・・」

その口から出てきた言葉は、最も聞きたくない言葉であった。役人が持つていけるだけの財産と兵を持って逃げ出したというのだ。何

とも・・・何とも残念な世の中になったものだ。

ポン

鳳凰

「え／＼／」

ナデナデ・・・

龍蓮

「よく頑張ったね。1人で怖かっただろう、逃げ出したかっただろう。でも、よく耐えたね。」

鳳凰

「ぼ、僕を子供扱いしないでください／＼／」

そう言葉では抵抗するものの、特に嫌がった素振りは見せない。それに瞳からは涙が静かに流れている。全く、この世はこんな子供に何を背をわせているというのだ。

龍蓮

「朱雀。これからは、一緒に行かない？」

鳳凰

「はい？」

龍蓮

「朱雀は優しいからこれからも困っている人を見つけたら必死に守ろうとするだろ？だから、その時は１人でなにもかも背負わないで、オレ達も一緒に背負わせてくれないかな？」

その問いに顔をパアッと明るくさせる朱雀。

鳳凰

「はい！仲然さん！」

その返答にオレも嵐もホッと安堵する。

龍蓮

「よし！そうと決まれば、あとは逃げた賊の残党を成敗だ！嵐！」

嵐

「はい。ここにきた烏７号と烏１３号によると・・・残党はまた合流し、向こうへ行ったそうです。」

と言って、ある方向を指さす。

龍蓮

「毎度のこと何で動物の言葉が分かるか疑問に思うけど・・・まあ

いい。朱雀はオレの馬に乗って。」

鳳凰

「はい！」

ピョンと馬に跨る。そして、オレの腰にギュッと掴まる。

龍蓮

「嵐！朱雀を泣かした賊共に天罰を与えるために、いざ出陣だ！！」

嵐

「御意！」

鳳凰

「あんまり言わないでください」

そして、3人を乗せた2騎の馬は駆け出した。

とある今は使われなくなった砦。

賊D

「た、助かったあゝ」

賊E

「はあはあ・・・死ぬかと思っただぜえ。」

先程、戦場から逃げ出した賊の全員がたどり着いていた。すると、留守番をしていた賊が出てくる。

見張り番

「おう！御頭はどうした？」

賊F

「やられた・・・」

見張り番

「え？だから、御頭は今、どこにいる？」

賊G

「だから！やられちゃったっていつてんだろ！？」

見張り番

「な！？な、わけねえだろ！！」

明らかに狼狽える見張り番をしていた賊。そして、ほかの賊も騒ぎ出す。が、

??

「静まりやがれ!!」

賊H

「あ、兄貴!？」

??

「で、御頭がやられたってのは嘘じゃねーんだな？」

賊G

「へ、へい!」

??

「ならば、今から俺様が新御頭だ!異議は!？」

賊兵

「「「「「あ、ありやせん!!!」」」」」

??

「（御頭が死んだんなら、あの小娘を食べても良いだろう・・・へへ・・・）」

新しい賊頭の顔が醜く緩んだ。

龍蓮

「なんでそれをもっと早く言わない!!」

鳳凰

「ご、ごめんなさい・・・」

龍蓮

「あ、ごめん。」

何故、普段は外道な奴とギャグパートでしかキレない龍蓮が怒鳴ったかというと、

龍蓮

「マズイな。早くしないとその“例の女”って人、食われちゃうぞ。」

「

鳳凰

「え!?!食べられちゃうの!?!あ、ですか?」

と、純粹にその言葉の意味のまま受け取ってしまう朱雀。

嵐

「鳳凰殿は、まだ分からなくていい。」

龍蓮

「それにしても“例の女”っていう位だから、ワケありか。高貴な

人物か。もしくは、」

嵐

「傾国の美女に匹敵する美しさか・・・ですね。食べちゃ駄目ですよ？」

龍蓮

「誰が食べるか!!」

と、ツッコミを入れるも・・・

鳳凰

「仲然さんも食べるんですか!？」

龍蓮

「いや、ああだから・・・」

嵐

「冗談ですよ、龍蓮様。」

普段はあまり見せない茶目つ気をこんなところで発揮する嵐。

しかし、それもここで終わりを告げる。

嵐

「賊の拠点はどつやらあそこのようです!」

鳳凰

「砦ですよ！？しかも、あんなに頑丈そうな門まで・・・」

龍蓮

「嵐、あの門は任せて良いか？」

嵐

「もちろんです！」

間に髪を入れず返事をする。

龍蓮

「じゃ、嵐は馬を降りて力を溜めて助走をつけて、門に突っ込んでくれ。そして、朱雀は空いた馬に乗って、門が破られたと同時に才しと一緒に砦に侵入だ！」

嵐&鳳凰

「御意！」「了解です！」

龍蓮

「強襲だ！！」

連絡係 A

「敵と思われる影、歩兵1騎馬2が物凄い速さで向かってきやす！」

新賊頭

「たったの3人だと？そんなもん蹴散らしてしまえ！！折角、今から楽しもうと思ったのによお！まあ、どっちにしろ俺様が出る必要もねえ。こっちは先に楽しませてもらうぜ・・・えへへ・・・」

「

気持ちの悪い笑みで横になっている“例の女”を見つめる新賊頭。そこにまたもや連絡が入る。

連絡係B

「只今、城門突破されやした！！」

新賊頭

「何ッ！？」

連絡係C

「敵は3人！見たこともない細い刀を3本使う奴と城門を破壊したデッサン反魔を使う奴、あとチビで偃月刀を使う奴でありやす！！」

連絡係D

「味方が半分以上戦死！もしくは動けやせん！」

それからも次々に自分たちに都合の悪い情報が回ってくる。否、情報が回ってくるだけでも凄いのだろう。

新賊頭

「皆の中に残っている奴も全員出撃だ！！俺様の家を荒らした罪を思い知らせなきゃならん！！」

鳳凰

「（敵が多い。多過ぎる。でも・・・何でだろう。負ける気はこれっぽっちもない。）」

朱雀の回りにいる賊が飛ばされる。

嵐

「敵陣後方に動きあり！・・・士気も上がっているようです。頭のお出ましのようです！」

嵐の周りにいる賊も宙に舞う。

龍蓮

「そんなこと見れば分かる！」

そして、オレの回りにいる賊は天に舞う。

嵐

「（いえ、皆様にも分かるようにと説明しただけなのですが・・・）

」

龍蓮

「何か言った!？」

と言っている瞬間にも、賊は空に投げ出されている。

嵐

「いえ、何も。」

龍蓮

「よし、朱雀!あの賊長をぶっ倒してこい!!」

鳳凰

「分かりました!!」

そう言った時には、朱雀は賊の間を抜け賊の頭を目指して駆け出していた。

鳳凰

「うおりゃー!!」

必要最低限の賊のみを排除し、突き進む。そして、

鳳凰

「はあはあはあゝ・・・・・・・・ふう。お前が賊長だな？」

新賊頭

「そうだが、ヘトヘトのオメエに何ができる！！俺様の楽しみを引き延ばした大罪、その体で・・・・いや、お前のカラダも良いな。・・・・うん、死なない程度には加減してやる！！・・・・えへへ・・・・」

鳳凰

「言ってる意味が分かんないよ！！お前は村を襲った賊の長！僕の緋龍偃月刀の錆にしてやる！！てやあ！！！！」

新賊頭

「へへへ・・・・・・・・え？あ、」

ザシュ！！！！

―孫呉に降り立つ者―典韋√（+呂霸&mp・鳳凰）

鳳凰

「敵、賊長討ち取りました!!」

そう宣した時に残っていた賊は、僅か50程度。しかしそれも、

龍蓮

「三刀流奥義 三・千・世・界!!」

あ、今パクリましたね？パクリましたよね！？

龍蓮

「・・・また、つまらぬ物を斬ってしまった。」

うわぁー凄いドヤ顔。

嵐

「これで、ここ賊は全部でしょう。」

龍蓮

「よし“例の女”・・・とやらを救出して、村に行こう。朱雀、行

くぞ〜」

鳳凰

「はい！」

そして、皆の内部へと入っていく。内部は至って綺麗に掃除がなされていた。その部屋の一つ一つに足を踏み入れ調べる。その中には財宝が大量に積まれている部屋もあったからそれはすべて回収。・・・そんなようなことを何度か繰り返し返していくと、とびつき豪華なばかり見える部屋が現れた。その部屋の扉から真正面には王座らしき椅子があつた。そして、両脇にそこそこ豪華な長椅子があつたそこに。・・・

龍蓮

「まさか、“例の女”って。・・・」

嵐

「そして、高貴そうな格好をしている訳ではない。と、なるとやっぱり。・・・」

龍蓮

「余程の幼女趣味だったんだな。」

嵐

「ええ。でも彼女はただ寝かされているだけのようです。」

まあ、暴れないように縄で縛られてはいるようだけど。・・・って、

あ。

??

「うう・・・あれ？確か、私・・・・・・・・きゃあ!？」

龍蓮

「ああ、脅かせてごめんね。今、縄を解くから待ってって。」

そう言って、丁寧な縄を解きに掛かる龍蓮。そして、

龍蓮

「はい、これで出来た。どう？痛いところとか無い？」

??

「は、はい。ありがとうございます。え、えーっとここはどこですか？」

龍蓮

「荊州のある賊の巣窟だった場所だよ。ま、もう賊は全員やつけたけどね。」

??

「け、荊州ですか!？・・・嘘、私は？州にいたのに・・・ああ、季衣の為に明日のご飯の買い物をしに行った先で賊の大軍に襲われて・・・・・・・・それであ。」

と、1人で納得してしまった。

龍蓮

「大丈夫？」

流琉

「ああ！ごめんなさい！私の名前は典章です。今回は助けていただきありがとうございます。お礼と言ってはなんですが・・・是非！流琉と読んでください。」

ぺコリと頭を深々下げる。

龍蓮

「いいえ、どういたしまして。オレの名前は孫仲然。真名は龍蓮。で、隣にいるのが呂覇と鳳凰だ。」

紹介された2人が、軽く頭を下げる。それに対しても流琉は頭を下げる。

龍蓮

「ところで、これからオレ達は近くの村に行くつもりなんだけど一緒に来る？」

流琉

「是非、お願いします。」

そして、やっとこさ村に入ることとなった。

村に着いてからの歓迎は、凄いものであった。特に朱雀は英雄視されていた。そして、朱雀の語る龍蓮と呂霸の武勇伝により2人の人氣も凄いことになっていた。そして、流流の料理の腕も凄かった。そして、その日は明け方まで盛り上がった・・・

ということでは翌日。（↑ツッコミを許可します。承認します。寧ろ推奨します。

オレ達4人は、新たに馬を2頭分けてもらい目的地へと向かった。

紅龍

「義兄上！今は何処へ向かってるんですか？」

龍蓮

「ん？今は、水鏡先生のところへ行くつもりだけど。」

紅龍・・・つまり鳳朱雀の真名なんだが、とは昨日の晩に義兄弟の

契りを結んだ。そして、それに伴って今後の方針を皆に打ち明けたのだった。それは、暫くの間は孫呉から離れ、自ら義勇軍を旗揚げするというものだった。

流琉

「あ、もしかして、有名な臥龍鳳雛を見に行くんですか？」

嵐

「まあ、龍蓮様の目的から見てm」

龍蓮

「そうそう。上手く行けばどっちも最低でもどっちかを引き抜けたらなあと思つてさ。」

そう、あの臥龍鳳雛が簡単に流される訳はないと思うが、こちらには有利な札が2枚もあった。

嵐

「（ま、まさか！？これは影を徐々に薄くして、しまいには名前だけ登場キャラみたいな残念な（以下略）」

空気と自分のキャラを勝手に壊すな！！

ただ単に、嵐が右の一番端っこにいて、龍蓮は左の端っこにいて聞こえなかっただけである。被害妄想も甚だしい。そして、この発言がフラグとなるのだった・・・（えwww

紅龍

「大丈夫です、義兄上！雛は僕の可愛い妹です。必ずや説得します！！」

龍蓮

「おう！鳳雛の方は任せた！」

紅龍

「任せました！！義兄上も臥龍攻略任せました！」

龍蓮

「任された！」

そんな微笑ましい義兄弟の絆に思わず頬を緩める流琉。そして、完全外野の嵐。やはり原因はあのセリフか・・・

ここは水鏡塾。

そこに4人はたどり着き、オレは、臥龍・所轄孔明と鳳雛・鳳士元、それから塾長である司馬徽と会っていた。

水鏡

「・・・それで、本日はどのようなご要件ですか？孫？さん。」

口調はとても穏やかに、されどその内に秘められているものはとても刺々しく感じられる。恐らくは、警戒をしているのだろう。

龍蓮

「では、単刀直入に・・・臥龍・諸葛亮と鳳雛・鳳統を引き取りに来た次第。」

諸葛亮& a m p ; 鳳統

「は、はわわ！？」「あ、あわわ！？」

水鏡先生も口には出なかったが、表情には驚きの表情を隠せないでいる。

龍蓮

「勿論、無理に引つ張っていく訳ではありません。ああそうだ。朱衣は元気に“たわわ”って言ってますから安心してください。」

水鏡

「朱衣・・・ということは、まさか孫？さんは孫堅さんの息子さんですか？」

龍蓮

「はい。母が亡くなってからは、美羽・・・じゃなかった。袁術のところまで客将として御世話係兼業務の補佐をやっていました。」

その言葉に、水鏡・孔明・士元の表情が変わる。

諸葛亮

「はわ！？と、ということは、もしかして袁術さんの街が急に活気づいたのって・・・」

龍蓮

「そう。み・・・袁術から内政を全部任されてね。」

鳳統

「あわわ、すごいのでし！袁術しゃんの噂からして、急に目が覚めることは無いと思うのにおかしいなあと思っていたのでし。」

水鏡も思考顔になっていた。そこで一先ず、話題を変える。

龍蓮

「ところで、士元。君に嬉しいお知らせがあるんだけど・・・入って！」

そう言うと、紅龍が入ってきた。それに流琉と嵐も続く。

鳳統

「あわ！？こ、こ、こ、紅ちゃん！？」

紅龍

「ひいなあ」

そう言つて、2人は人目があることも気にせずに抱きつく。微笑ましいなあ、というのがオレ達。孔明は「はわわ／＼／＼離里ちゃん／＼大胆・・・」くらいに思っているのだろう。水鏡先生は・・・
「あらあら」・・・くらいだろうか？

鳳統

「紅ちゃん・・・おつきくなつたね。」

紅龍

「雛は変わらないね!」

だがしかし、その言葉が言い終わるかどうかというタイミングで、時期はずれの紅葉が紅龍の頬に落ちていた。

流琉

「（あちゃ／＼女の子にそれはないですよね?）」

龍蓮

「（多分、土元も一番気になってるところだと思つし・・・ね。）」

鳳統

「紅ちゃんのばか!ばかつ!ばかあつ!!!」

紅龍

「（何で怒るのか分からないけど・・・）ご、ごめんってば！？ほら、泣き止んでよ雛あゝ皆見てるから。」

その言葉に、ハツとしたのか怒って赤くなっていた顔が羞恥心でもっと赤くなり「しゅみましえん」とカミカミでオレらに謝った。とりあえず微笑ましく眺めていたオレは、話を本題に戻すために態とらしく一つ咳を入れて話題を戻した。

龍蓮

「そついえば朱衣から、一番下の妹の話を聞いていたんだけど・・・いるかな？」

水鏡

「ああ、朱那のことですね。」

そう言うと、諸葛均の真名を大声で呼んだ。すると、遠くからパタパタと可愛らしい足音を立て、部屋の扉が開いた。

諸葛均

「よびましたかあ？すいきょうせんせえ？」

水鏡

「はい。この方があなたがいつも『お義兄ちゃんが出来た』と喜んでいた孫？さんですよ。」

・・・What!?!じゃなくて、何イ!?

朱那

「うわぁ・・・は、はじめまして!しゅいおねえちゃんのみつまい、
しよかつしぎよです。しゅなってよんでください」

何か目を輝かせてるよ・・・

龍蓮

「オレは孫仲然。この間まで朱衣が付き人をしていた人だよ。龍蓮
つていう真名を渡しておくよ。それで早速なんだけど・・・
何でお義兄ちゃんと?」

朱那

「???しゅいおねえちゃんのだんなさまなら、しゅなのぎりのおに
いちゃんだよね???・・・そうてがみにかいてあったけど・
・」

平仮名で読みにk・・・ではなくて、聞き取りにくいが、確かに「
朱衣の旦那」と言ったよな?えーっと・・・オレが?

嵐

「そうなんですかyo?」

龍蓮

「誰？」

嵐

「……………いえ、何でもありません。」

龍蓮

「それにしても、そんな雰囲気醸し出したことなんてなかったけどなあ。」

嵐

「（うゝむ……少々感じが違ったか。）して、龍蓮様。」

龍蓮

「嵐。無理に個性を出そうとしなくていい。だから……だから！ ちょっと黙っといてくれ。」

嵐

「はっ。」

段々と目に見える形で扱いが雑になっていく嵐。頑張れ、嵐。きつと黄巾の乱では活躍できるさ。

龍蓮

「もし、良ければ朱那。朱衣からの手紙を見せてくれないかな？」

朱那

「はい！いいですよ。」

ここで、あのスレ違いが発覚するのであった・・・

―孫呉に降り立つ者―典韋& a m p ;諸葛亮& a m p ;鳳統√（+
呂霸& a m p ;鳳凰）

三顧の礼・・・ならぬ一顧の礼で、孔明と士元・・・いや、真名を預かったから朱里と雛里をオレ達一行に加えられたのは、鳳兄妹の相互溺愛ぶりと朱那の説得があつてのことだろう。・・・それに關しては、まあまた今度、朱衣にきちんと事情聴取をしなければならぬが・・・

そしてしばらくの間、孫呉からは距離を取り義勇軍を立ち上げ活動をする、水鏡先生に言々と、水鏡公認の義勇軍として活動しても良いとお達しをもらえた。オレは、それとこの間、賊討伐の時に得た金銀財宝の山を武器に、これもこの間助けた村を拠点に“孫？義勇軍”を旗揚げしていた・・・

朱里

「はわわ・・・す、すごいです。」

と、目を真ん丸にして目を見開いている。

龍蓮

「ん？何人集まったんだ？」

雛里

「あわわ・・・昨日の集計時点で2000を超えちゃったのでし。」

具体的な数字は隣にいた雛里が答えてくれた。・・・ふむ。これだけの短時間で、義勇兵が2000も集まるということは、それだけ生活が困窮していて尚且つ賊の存在が大きくなってきているということなんだな。

龍蓮

「2000か・・・（思ったよりも結構集まったな）・・・よし、とりあえずはこの辺でやめておこう。資金だって今はあるとはいえ、有限だしね。」

朱里

「はい。それが良いかと。」

即答で同意の意を表明してくれる朱里。

龍蓮

「それじゃ・・・雛里。それぞれの将に隊として割り振ってもらえるか？」

雛里

「はい。」

基本的には、軍事的な事は雛里の方が得意だから、雛里に任せることが多い。朱里は内政の方が長けているように思えるから、主にそちらを重点に置いてもらっている。まあ、2人ともすごいから大体の事はどちらがやっても問題はないけどね。

それから暫くは、訓練や周辺の村の警備が主な活動となっていた。それから1000人規模くらいの比較的少数な賊には大体500くらいの隊をローテーションで行かせ経験値を稼がせるなどのこともしていたが、そうすると超絶馬鹿共も少しは頭を働かせたのか、次々と小規模の賊軍が次第に集まりだして最近では、敵軍勢力が500とかも多く見かけるようになってきた。

そんな時に、ある一方がもたらされる。

忍者

「報告します！龍蓮様！」

仮面を着けた人間がひとり、何処からともなく龍蓮の隣に現れる。
正しく『忍』と呼ぶのに相応しい。ということで、彼女には真名を
あずけているし、他の斥候などとは区別するためにも敢えて『忍者』
と表示しておく。

龍蓮

「おう。」

忍者

「この地に向かって砂塵を巻き上げながら進軍してくる賊軍が！」

こういう事になることは、大体予想済みだったが、こうも早くなる
とは・・・

龍蓮

「続けて？」

忍者

「はっ。その数、目測で5000！それにほぼ全ての者がどこかし
らに黄巾を身に付けております！」

黄巾の乱の始まりか・・・

忍者

「恐らくは、我らが蹴散らした賊軍の残党やまだ潜んでいる賊軍の大連合軍かと……」

龍蓮

「分かった。引き続き賊の大軍に目を光らせておいてくれ。」

忍者

「はっ。」

その声と共に、その者の姿は消えていた。そして、それから直ぐに義勇軍の主要メンバーが集められた。

続報として賊の大連合軍は3、4日後にはこちらに着くだろうとの報告が入っていた。そして現在は緊急会議中だ。

龍蓮

「それで雛里。周辺の協力関係にある村々で兵を補充するとしたら、あとどれくらいの増員を見込める？」

雛里

「はい……多く見積もっても1000人程かと。」

雛里は手元に持っている近隣の村の人口情報が書かれた竹簡を確認しながら言った。

朱里

「兵法としては邪道ですが、ここは策を講じて乗り切るしかないかと・・・」

援護射撃を行うかのような連携で、上手く朱里が雛里の少々足りなかった言葉を付け足す。

龍蓮

「よし・・・誰がある！近隣の村連合に伝令。内容は“念の為、簡易防柵を拵えるように”と。まあ、敵は真っ直ぐここに来ると思うけどね。」

その言葉に、朱里も雛里も同意を示した。

龍蓮

「次は、この村の防衛だけど・・・朱里、何かあるか？」

朱里

「・・・はい。まずは南門を完全に封鎖しましょう。そして分かりやすい堀や柵なども作っておきましょう。」

龍蓮

「うん、それで？」

オレはその先を促す。

朱里

「はい。そして反対側の北門には深めな落とし穴を数多く作って足止めを掛けます。その間に東門と西門に龍蓮様と嵐さんを置き各個撃破し、そのまま挟み込むようにして北門に留まっている敵賊軍を挟撃しましょう。」

龍蓮

「大筋は大体良いと思うけど・・・紅龍は？」

紅龍

「えっ僕？僕は軍師ではないし、うん雛は？」

雛里

「私も朱里ちゃんの策で良いと思いましゅー！」

うんうんと残りの面子も首を縦に振る。

龍蓮

「じゃあ一つ。試してみたい事があるんだけど・・・」

それから3日間。兵のみならず村人をも総動員して、賊の大連合軍を迎え撃つ準備をしていた。それは順調に進み、南門は完全に封鎖され、北門周辺は見えにくい罫の大密集地域となっていた。

流琉

「龍蓮様。本当に南門には兵を配置しなくて良いんでしょうか？」

龍蓮

「大丈夫だよ。あそこは賊軍の進路から一番遠いし、何より障害物が他のところよりかなり多くしてある。態々そんなところには飛び込まないだろうさ。」

そこに斥候からの一方が入る。どうやら賊軍が目視できるらしい。

龍蓮

「よし流琉！全軍集合だ！」

流琉

「はい！」

そして、義勇軍3000の総大将として号令をかける・・・

龍蓮

「皆の知っている通り今、村には賊の大集団が迫ってきている！！

だがしかし！敵は所詮、烏合の衆！我々のように日々の訓練をしているわけでも無し！

命を賭けても守りたい者がいるわけでも無し！！

そんな輩に義勇軍最強と謳われる我ら“孫？義勇軍”が負けることなど万に一つも有りはせぬ！！

！
天に向かって叫べ！！全身全霊で持つて賊共に天罰を与えよ！！

義勇兵

「「「「「応ッ！！！！！！！！！！」」」」」

東門。ここには大将である龍蓮と補佐として朱里が陣頭指揮をとっていた。

西門。ここには嵐と紅龍が指揮をとっていた。

南門。ここは全くの無人。しかし代わりに防柵や堀などがかなり作られている。

北門。ここは流琉と雛里が指揮をとっている。そして一番苛烈な戦闘を繰り広げていた・・・

流琉

「敵は今、人口沼にハマって動きが鈍っています！」

雛里

「弓隊！火矢を放ってくださいでし！！」

そうして放たれた火矢は綺麗な放物線を描いて人口沼で立ち往生している賊どもの足元に降り注がれる。そして、その足元からは明らかに不自然な炎が燃え広がる。それは人口沼全域に瞬く間に広がる。それにより、賊軍の本隊は大混乱だ。そんな戦果を見て雛里は満足気な表情を浮かべている。

雛里

「やっぱり人口沼にお酒を使ったのは正解でしたね・・・それにしても凄いでし・・・」

轟々と燃える炎を見て、そう呟く。そして体に燃え移った火を消そうと火が回っていない別の人口沼に飛び込む賊兵達。しかしそこもお酒の人口沼であった。（【図1】）

その炎が空に高く舞い昇り、上昇気流を起こす。それにより囲まれるようにあつた賊連合軍本隊4000が火炎旋風に巻き込まれ成す術もなく飲み込まれていく。その光景は地獄なんというレベルの問題ではなかった。

それからすぐに、西門と東門を攻撃していた各500の賊が敗走を始める。それに対し、それぞれ嵐と朱里に追撃を任せ、紅龍はただちに北西に向かった。そして・・・

紅龍

「皆さん！一斉に土嚢を破壊してください！！行きますよ！！
3！2！1！！」

との号令により、それほど多くはない水量だった川を塞ぎ止めていた土嚢を破壊し、一気に人口沼を押し流していった。後に雨も降り、火災旋風によって村に被害が出るということもなかった。

龍蓮

「皆の者！勝ち鬨を挙げよ！！我ら“孫？義勇軍”の大勝利だあ！！！」

義勇兵

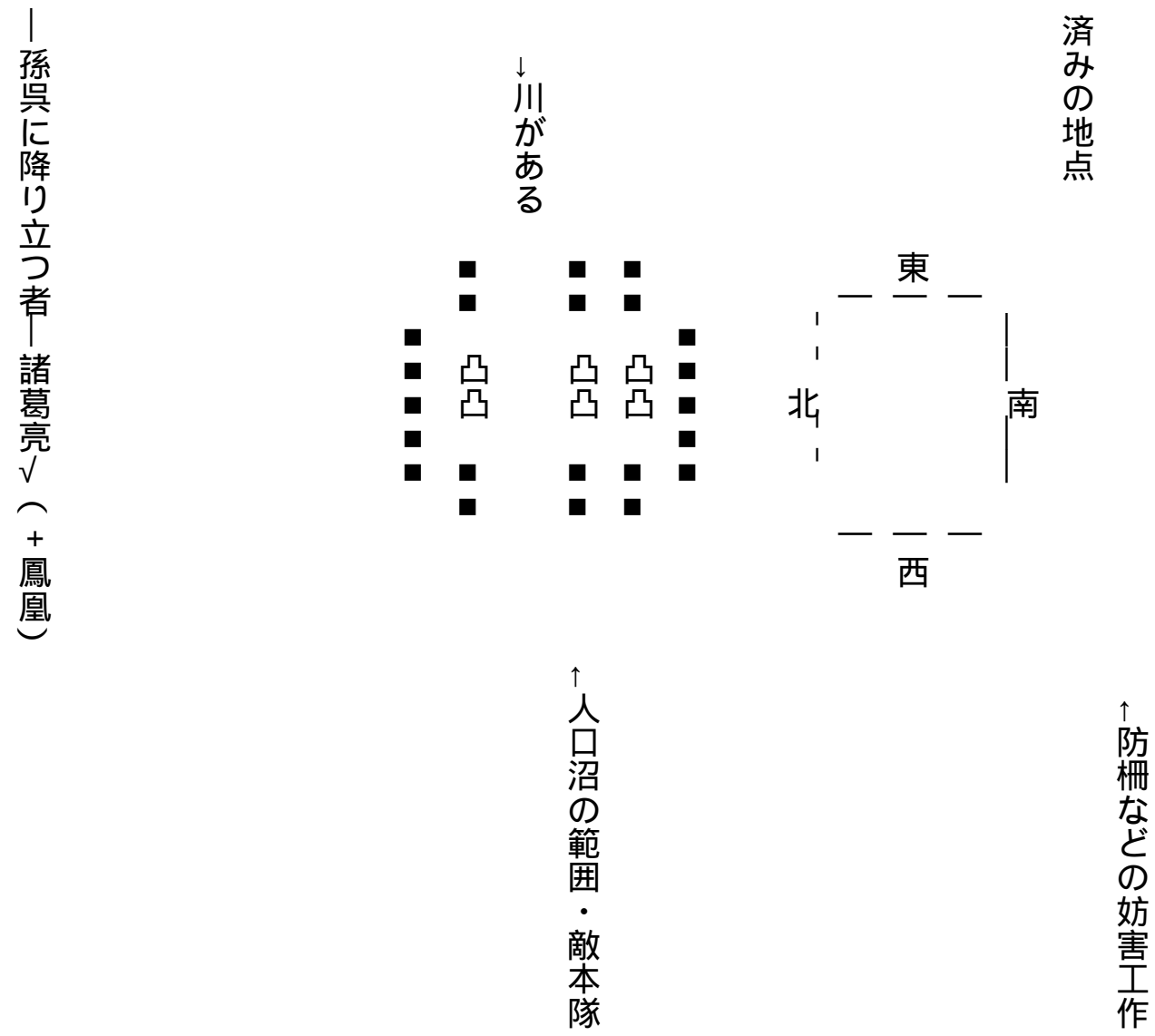
「才才才才才！！！！！！！！」

それから瞬く間に、この大勝は大陸全土へと響きわたった。

それもそうだろう。この時期に賊軍5000という数字はかなり大きいし、それに対して義勇軍は3000という寡兵でこのような戦果を挙げたのだから。しかも正規軍ではない義勇軍で。しかも何か？死亡者数は賊軍の約5000に対して、義勇軍0とな。

今回の一件で荊州の賊の数はガクツと減り、諸侯も一氣に無視できない存在へとなるのであった……

【図1】



オレ達は今、豫州に来ていた。豫州各地にいる義勇軍からの援軍要請が来ていたのだった。それには訳があつた。何故なら豫州では黄巾党が活発化してるのである。それで汝南郡→沛国→魯国→沛国→陳国→梁国→潁川郡の道筋で各義勇軍を纏めながら黄巾党がいる潁川に向けて行軍しているのであつた。そしていまは2度目の沛国にいるところであつた。

龍蓮

「それにしても幾ら名が売れたとはいえ、実質援軍としてではなく指揮権の譲渡までされるとは・・・ね。」

ちなみに嵐、流琉、雛里の3人はお留守番組だ。史実では荊州の方が早く黄巾党が活発になるが、あの大戦果が影響しているのか、まだ大人しいがいつ動き出すかもしれんので置いてきたのであつた。まあ、最悪の場合は嵐が3万を1人で相手すれば良いだろう・・・くらいなノリで。

すると、紅龍が突然入ってきた。

紅龍

「義兄上！今日までに合流した義勇軍の数は5000にまでになりました！このまま行くと10000にまで及ぶかもしれません！」

龍蓮

「分かった。それじゃこれからその部隊も訓練に編入して。」

紅龍

「了解です!」

そういうと、風のように天幕から出ていった。それとほぼ同時に、背後から気配を感じる。

龍蓮

「どうだった?」

忍者

「はっ。豫州・潁川黄巾軍の波才ですが、内応でも暗殺でも御命令とあらば。」

龍蓮

「じゃ、まだ水面下の荊州・南陽黄巾軍は?」

忍者

「はっ。張曼成には調略は上手くないかと。」

龍蓮

「そうか。それじゃ、今のところは情報収集のみに専念して。」

忍者

「御意。」

そういつた瞬間には、スツと消えていた。全く、どうやっているのだか……

龍蓮

「皆の者！勝ち鬨をあげよ！！」

義勇兵

[illegible]

けたたましい雄叫びが豫州潁川郡のとある城に響いていた。

龍蓮

「1番隊から7番隊それから11番隊と12番隊はオレに続いて入城！！8番隊、9番隊、10番隊は賊残党の追撃に向かってくれ！鳳凰隊もそれに同行しろ！！」

一通りの指示を出すと一息ついた。

朱里

「無事に終わりましたね。幸いどの隊も被害は軽微だそうですし・・

・
」

龍蓮

「13番隊は壊滅だけだな。」

朱里

「・・・・・・・・」

龍蓮

「アイツらが望んだことだ。朱里がそこまで気落ちすることはないよ。ただ、逃げずにそのことを受け止めればいい。」

朱里

「・・・・・・・・はい。」

さて、この13番隊とやらが何なのかというところから説明しよう。まず“新生 豫州 孫？義勇軍（仮）”には、豫州各地から集まった義勇軍によって編成されている。

その部隊は紅龍率いる鳳凰隊2000と1番隊から12番隊に分けられた各義勇軍の隊、それから行軍中に交戦するなどして加わり龍蓮の弁により更生した元賊兵部隊である13番隊から成っていた。

龍蓮

「やっぱり賊だってさ、人間なんだよ。もちろん外道なことをすることもあるし、実際にオレも斬ったことも何度もある。そして皆からは獣に例えられる。でも人間なんだ。その証拠に・・・ほら。」

と言つて、戦場に転がっている中で黄巾を身に付けていなく且つ剣しか装備していない兵の死体を指す。

龍蓮

「最期に人の為に役に立てた、罪滅ぼしのほんの一握りでもできた。そんな顔じゃないか？・・・犯した罪は決して消えはしないけど、少しは人間らしく生きれた瞬間だったんじゃないかなと思う。」

それが戦場だったのはおかしい話だけどね。と呟くように付け足す。

龍蓮

「ま、とにかく。アイツらの人間らしさっていうのを取り戻させてあげたきっかけをくれてありがとな、朱里。きっとアイツらもそういうに決まってるよ。」

ポンポンと頭に手を置いて、先に入城する龍蓮。その背に

朱里

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、ありがとうございますゆ。」

感謝の言葉と共に、瞳からも何かがこぼれた。

13番隊の運命は簡単に説明するところだった。豫州孫？義勇軍が豫州黄巾党を目指し行軍していた途中に発見した、若しくは攻撃し

てきた賊軍の投降兵を更生させ纏め上げた隊で、その更生過程で龍蓮や朱里の話やシゴキなどを受け、龍蓮の思想に感銘を受けた者の集まりだった。そして、最も危険な囃部隊を13番隊全員が志願し戦場にて、人間としてその命を散らした。

その更生過程を見てきた朱里は、感情移入をしてしまったのだろう。彼女は軍師で時には冷徹な策を出すこともあるが、軍師である以前に1人の心優しい少女であることも皆には忘れないで欲しい。

その日の夜は、煙を高々と上げた火葬が盛大に行われた・・・

――孫呉に降り立つ者――典章✓

それから1週間は、各方角に散った豫州黄巾党の残党の掃討に追われることとなった。それも難なく終え、豫州孫？義勇軍は最後の会議にて一応、解散の形を取ることとなった。

そして豫州孫？義勇軍12000の内、4000が孫？義勇軍に加えることになり、他の8000は豫州にて各々義勇軍を続けるそうだ。

それで新たに加わった兵4000を率いて、荊州にある孫？義勇軍

の本拠地に戻っているはずだったが、今は流琉と2人で逆方向の？州に向かって北上している最中だ。

流琉

「すみません龍蓮様。私の我儘を許して下さいだけでなく、付き合わせてしまって・・・」

それはもう、本当に済まなそうに謝る流琉。

龍蓮

「兵が4000も増えたことだし、上手く行ったらその・・・何とかちゃんって子も将として入ってくれるかもしれないでしょう？なら、こつちにも全くの無利益っていう話でもないんだし、朱里もそう言うておいてくれるって言うてたから、流琉が謝る必要は全く無いよ。」

流琉

「／／／あ、あの、その・・・ありがとうございます。」

龍蓮

「んゝどういたしまして？」

とりあえず“ありがとう”と言われたら、“どういたしまして”と返すことにしている龍蓮。それは作者も同じだ。（お前の情報はいらん）↑すみません><

それから暫くは道なりに北上を進み、特に何事もなく？州に入った。
・

本当に何事もなかったのだ。特筆できるような何かは何も。それとも何か？龍蓮が天然（という設定で）で流琉をドギマギさせるという無限ループでも見たいか？少なくともオレは勘弁だね。↑天の声

という訳で、？州に入ってから何事かが起きたからここから物語の再スタートボタンを押すことにしよう。

流琉

「龍蓮様！あそこに砂塵が！」

確かに、オレの自分で作った自前の望遠鏡で見ると、女性の旅人らしき3人組が賊の小集団に襲われてる。その距離は約500m。

龍蓮

「行くぞ！」

流琉

「はい！！」

オレ達はそれぞれ自分の獲物を手にして、全力疾走で荒野を駆け抜

けた。それはそれは駿馬ともサシで張り合えるんじゃないかというくらいの速さでだった。その速さを生かして、その勢いのまま賊の小集団の横腹に突撃。しかもそのまま反対側にまで出てしまった。

龍蓮

「あ、行き過ぎた。」

流琉

「龍蓮様行き過ぎです!」

などとコントをやっている間にも、賊は突然の襲撃に逃走を図っていた。

??

「逃がすか!」

龍蓮

「流琉追うぞ!」

流琉

「はい!!」

その場には、女3人組の内、残り2人が残された。

??

「行っちゃいましたねー」

??

「・・・はあ。」

―孫呉に降り立つ者―典韋& a m p ; 趙雲& a m p ; 程? & a m p ; 戲志才(?) ✓

それから間も無く、賊を蹴散らし終えて合流した。

趙雲

「御二方、助太刀感謝致す。私は趙子龍。以後お見知りおきを・・・」

「

龍蓮

「あの有名な常山の昇り龍か・・・オレは孫仲然。今は荊州で義勇軍の大將をやっている。で、隣が典韋。典韋はウチで将とか副官とかやってもらってる。」

その紹介に流琉はペコリと頭を下げた。

戯志才(?)

「あなたが今、巷で噂になっている・・・私は戯志才です。」

??

「・・・・・・・・ぐう。」

戯志才(?)

「寝るな！」

??

「おおっ!？」

何なんだ・・・この漫才師は。とか何とか、思っていると・・・

??

「風は今、夢を見ましたのです!。それは日輪を支える夢だったのですよ。」

何が言いたいんだ、この子は。

風

「ですから、風の事は風とお呼びくださいー」

戯志才(?)

「ちよ、ふ、風!？」

龍蓮

「ですからは接続詞だろ・・・(全く繋がってない)」

すると、風・・・って呼んでも良いんだよね?の頭に乗っかってい
る人形が喋った(ということにしておいてくれ)。

??

「おうおう兄ちゃん!ちよっと鈍チンだぜ?」

風

「こらこら宝?。風の主にそんな言葉遣いは駄目ですよー」

戯志才(?)

「・・・・・・・・すみません。」

龍蓮

「いや、大丈夫だ。うん。」

何だか、どんどんと深みに嵌っていく感覚が・・・

龍蓮

「えーっと、つまり風はオレ達と一緒に来てくれるっていう訳なの
か?」

風

「はいー」

・・・らしい。

龍蓮

「それじゃあ、とりあえず今は？州にいる流琉の友達を勧誘しに行く最中なんだ。ちよつと遠回りになるけど良い？」

風

「もちろんですよー宝？も良いですよね？」

宝？

「おう！」

趙雲

「では、私も同行してもよろしいか？」

その問いに肯定の意を首を縦に振り表明する。

風

「じいー」

と、眼差しを向ける視線の先には戯志才がいた。そして1つ溜め息

を吐くと、

戯志才(?)

「すみません。私もよろしいでしょうか？」

龍蓮

「もちろん。」

こうして、2人から5人に増えて？州の道を進んでいた。そこで落ちてきたのだ。・・・そう人間が・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6338z/>

真・恋姫†無双～大陸に降り立つ者～

2011年12月21日06時49分発行